

令和3年度 教員個人評価の集計・分析報告書

佐賀大学工学部

評価委員会

令和4年9月

目次

令和3年度教員個人評価について	1
1. 教員個人評価の実施状況	3
1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など	3
1.2. 教員個人評価の実施概要	3
1.2.1. 評価組織	3
1.2.2. 実施経緯、内容、方法等	3
1.2.3. 添付資料	5
2. 理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となつて行った教育研究活動等	6
3. 評価領域別の集計及び分析	9
3.1. 教育の領域	9
3.1.1. 講義担当等に関する事項	9
3.1.2. 教育改善に関する事項	11
3.1.3. 教育研修・FDに関する事項	18
3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項	22
3.1.5. 学生の受賞等	23
3.2. 研究の領域	25
3.2.1. 著書、論文等の発表実績	25
3.2.2. 共同研究などに関する活動実績	27
3.2.3. 受賞等の実績	29
3.3. 国際・社会貢献の領域	30
3.3.1. 国際交流実績	30
3.3.2. 社会貢献実績	33
3.4. 組織運営の領域	39
4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価	41
4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度	41
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム	43
4.3. 評価委員からのコメント	50
令和3年度理工学部評価委員会委員	55

令和3年度教員個人評価について

理工学部における教員の個人評価は、各教員から提出された個人目標申告書、活動実績報告書及び自己点検・評価書に基づき、理工学部評価委員会の下に置かれた理工学部個人評価実施委員会において行うこととされ、本報告書はその令和3年度分を取りまとめたものです。

教員自己点検・評価は、まず各教員が教育、研究、国際交流・社会貢献および組織運営の4つの観点から5段階で評価を行います。次に個人評価実施委員会が、教員の資質向上と諸活動の活性化、ならびに本学および理工学部と理工学研究科・工学系研究科の目標達成に向けた活動という観点から個人評価点の妥当性を点検します。

各部門の詳細は本編に記載されていますので、ここでは理工学部全体について総括します。

本年度は昨年度に引き続きコロナ禍により制限の多い1年となりましたが、全ての教員が回答していることにより、各教員が4つの観点を意識して積極的に日々の業務を実施していることが伺えます。評価の4つの観点全てに対して大きな成果を上げることが期待されますが、特に教育と研究は大学の使命であり、高いレベルが求められています。

教育活動では、多くの授業は対面授業となりましたが、そのような中でも学生・教職員の健康に配慮して、対面とオンラインの2重体制にせざるを得ない授業が多くありました。このことは、学部改組の過渡期であることや博士後期課程の改組および教員の減少などと相まって、教育に対する極めて大きな負担となりました。しかしながら、このような困難な状況にありながらも、各教員の努力と創意工夫によりこの難局を無事に乗り切ることができたことは、教員をはじめとする本学部構成員の実力の高さが伺えます。そして、令和2年度に蓄積したオンラインコンテンツを活用したより質の高い教育を実施することができました。また、教育の国際化を推進するものとして、環境・エネルギー科学グローバルプログラム(PPGA)、環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム(EPGA)および大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)に加えて、AI・データサイエンス高度人材育成プログラム(EPAD)を新しくスタートさせるなど、本学の国際課を牽引する教育プログラムを提供しています。また、大学院生向けの短期留学プログラム(SPACE-SE)も新たに設置し、令和3年度秋学期には3名を受け入れました。さらに、きめ細かな研究指導が行われており、36件の学生受賞に結びついています。コロナ禍前の水準に戻ってはいないものの、令和2年度からは倍増しています。

研究においても同様に、厳しい状況の中にあっても各教員が高いアクティビティを維持し、多くの学術論文の出版、50件以上の共同研究の実施、14件の受賞という良好な成果を上げています。

国際交流においてもコロナ禍の影響が続いていますが、組織的な取り組みである国際パートナーシップ教育プログラムの実施は4件と令和2年度の倍の件数を実施しています。また、オンラインを活用した国際学会への参加や留学生の受け入れを行っており、それぞれの教員ができることを着実に実施しています。

社会貢献では、高大連携による地域教育への参画、各種自治体の審議会・委員会構成員としての地域貢献、学会役員としての学会活性化への取組みなど、例年同様の 140 件を超える取組みにより佐賀県を中心として広く社会に貢献しています。

組織運営は、全教員が日々の業務に真摯に取り組むとともに、多くの教員が学長補佐や他部局・センターの運営委員・併任教員を務めることにより本学部のみならず全学の運営にも大きく貢献しています。

理工学部では、全てのステークホルダーの皆様から頼りにされる存在になるということをお大義としています。本報告書に示されていますように、この大義の実現に向けて各教員はそれぞれの自由闊達な発想により PDCA サイクルを回し、改善を続けています。これからの我が国は女性の活躍なくして発展していくことができないでしょう。これは理工系の分野でも変わりなく、理工学部としても理工系産業に貢献してくれる女性技術者・科学者を育成すべく力を入れているところです。令和 3 年度はプロジェクト助教を 3 名採用することができ、7 名の教員が教授・准教授に昇任しましたが、教員数の減少に伴う教育・研究への影響は小さくなく、これからもステークホルダーの皆様に価値を提供し続けていけるよう人員充実を大学執行部に訴えていきます。そして、各教員には今後もそれぞれの幸せと佐賀大学の発展に向けて高いアクティビティで活躍してほしいと願っています。これからも教員一丸となって取り組みますので、皆様のご指導・ご鞭撻ならびにご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

理工学部長
豊田 一彦

1. 教員個人評価の実施状況

1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など

理工学部所属の教員（教授、准教授、講師、助教）に対して、別紙様式1～4に関して教員個人評価を実施し、下記表の全員から回答を得た（回答率100%）。（令和4年7月1日現在）

部 門	回答教員数	回答率(%)
数理	9	100
情報	15	100
化学	21	100
物理学	12	100
機械工学	24	100
電気電子工学	21	100
都市工学	21	100
理工学部（合計）	123	100

1.2. 教員個人評価の実施概要

1.2.1. 評価組織

理工学部評価委員会ならびに理工学部個人評価実施委員会

1.2.2. 実施経緯、内容、方法等

- ① 令和4年2月1日
 - 学部長は、退職（予定）教員を含む全教員に対し、令和3年度活動の自己点検・評価を行い、別紙様式1、3、4を令和4年3月31日までに提出するように依頼した。同時に、退職（予定）教員以外の全教員に令和4年度の各様式もメールにて送付し、別紙様式1（令和4年度活動の「個人目標申告書」）の作成・提出も併せて依頼した。
- ② 令和4年2月1日
 - 学部長は、全教員に対し、教員活動データベース及びポートフォリオシステムについて、それぞれ、令和4年3月31日までに入力するように依頼した。
- ③ 令和4年3月10日
 - 学部長は、退職（予定）教員以外の全教員に対し、別紙様式1、3、4の提出期限を【変更前】【提出期限：3/31】⇒【変更後】【提出期限：4/28】へ変更するとお知らせした。
- ④ 令和4年5月11日
 - 教員活動データベースシステム全学管理責任者から、全教員に対し、教員活動

データベースへの入力について依頼があった。

- ⑤ 令和4年5月11日 第1回理工学部評価委員会開催
 - 令和3年度教員個人評価のスケジュールを決定した。
 - 令和3年度教員個人評価集計と分析報告書(様式)について決定した。
 - 理工学部個人評価用集計シート及び理工学部・理工学研究科・工学系研究科個人業績集約方法の様式を決定した。
 - 令和4年度理工学部自己点検・評価スケジュールを決定した。
- ⑥ 令和4年5月11日
 - 副学部長(評価担当)は、個人評価実施委員(各部門長)に、各教員から提出された令和2年度の各別紙様式(1、3、4)、「個人評価用集計シート」、「個人評価用集計ツール」、「個人業績集約の方法」、「令和3年度教員個人評価(部門)集計と分析報告書」の様式を送付し、「令和3年度教員個人評価集計と分析(部門)」の作成を依頼した(USBメモリーを手渡した)。
- ⑦ 令和4年5月11日
 - 学部長は、個人評価実施委員に、令和2年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行い、令和3年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)への記載を依頼した。
- ⑧ 令和4年5月31日
 - 個人評価実施委員は、令和3年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4、別紙様式1、3も含む)を学部長へ報告した。
- ⑨ 令和4年6月30日
 - 個人評価実施委員は、「令和3年度教員個人評価集計と分析(部門)」を学部長へ報告した。
- ⑩ 令和4年7月1日～7月19日
 - 学部長は、令和3年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、個人評価実施委員が記載した令和3年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)の評価内容を確認し、必要があれば評価結果の補足等及び学部長コメントを記載した。なお、学部長は、審査にあたり、審査の公平性を確保するために、必要に応じ、他の職員から意見を求めた。また、学部長は、必要に応じ、評価内容について、当該教員から意見を聴取した。
- ⑪ 令和4年7月29日
 - 副学部長(評価担当)は、理工学部の令和3年度教員個人評価集計・分析報告

書（案）を取り纏めた。

⑫ 令和4年8月1日

- 学部長は、令和3年度活動の「個人評価結果」（別紙様式4）および「令和3年度教員個人評価集計と分析（部門）」を、当該教員に通知した。
- 各教員は個人評価の結果に対して異議がある場合は、通知後2週間以内に異議申立書（様式任意）を学部長に提出することとなった。

⑬ 令和4年9月1日

- 学部長は、理工学部の教員個人評価集計・分析報告書を作成し、理工学部評価委員会に対し、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を付託した。

⑭ 令和4年9月7日

- 評価委員会は、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を行い、同報告書を承認し、その結果を学部長に報告した。

⑮ 令和4年9月15日

- 学部長は、「教員個人評価集計・分析報告書」を添えて理工学部教員の個人評価結果を学長に報告した。

1.2.3. 添付資料

佐賀大学大学評価の実施に関する規則（平成17年3月1日制定）

佐賀大学理工学部における教員の個人評価に関する実施基準

「理工学部における個人達成目標の指針」（教員用）

個人目標申告書（別紙様式1）

教員報告書（別紙様式2）：理工学部教員活動実績年次報告書（推奨様式）に読み替え

自己点検・評価書（別紙様式3）

個人評価結果（別紙様式4）

2. 理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等

理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等を以下に示す。

- 理工学部国際パートナーシップ教育プログラム（平成 16 年度より）
 - ・ コロナ禍の影響もあり、一部予定していたものの中止があったものの、令和 3 年度は 4 件実施した。パートナー機関は、遼寧大学（中国）、延世大学（大韓民国）、武漢大学 電気及び自動学院（中国）、ランブンマンクラット大学・ハサヌディン 大学（インドネシア）、カントー大学（ベトナム）で、化学部門、物理学部門、電気電子工学部門、都市工学部門の教員が参画した。
- 環境・エネルギー科学グローバルプログラム（PPGA）（平成 25 年 10 月より）
 - ・ 外国人留学生と日本人学生が共学し、世界的な環境とエネルギー問題の解決に関する講義などの教育カリキュラムを全て英語で実施するプログラムである。
 - ・ 前期課程プログラムは、令和 3 年度をもって当初計画のプログラム期間が終了した。その間、循環物質化学専攻、機械システム工学専攻、電気電子工学専攻、都市工学専攻、先端融合工学専攻の教員が担当した。また、博士後期課程プログラムは、工学系研究科システム創成科学専攻の化学、機械、電気電子、都市、先端融合分野の教員が参画している。なお、令和 4 年度末をもって前期課程同様、プログラム期間が終了予定である。
- 環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム（EPGA）（令和 2 年 10 月より）
 - ・ 科学技術の向上には、環境・エネルギー保全の観点からの取り組みに加え、健康科学の普及も必要との考えをもとに、これまで外国人留学生と日本人学生が共学し、一定の成果を上げてきた PPGA をさらに継続深化させた教育カリキュラムとして、令和 2 年 10 月（前期および後期課程）にスタートさせた。これまで募集定員を超える応募があり、前期課程で 14 名、後期課程で 21 名の学生を受け入れている。
 - ・ 前期課程プログラムは、理工学研究科の機能材料化学コース、機械エネルギー工学コース、機械システム工学コース、電気電子工学コース、都市基盤工学コース、建築環境デザインコース、先進健康科学研究科の生体医工学コース、健康機能分子科学コースの教員が担当した。また、博士後期課程プログラムは、工学系研究科システム創成科学専攻の化学、機械、電気電子、都市、先端融合分野の教員が参画した。
- AI・データサイエンス高度人材育成プログラム（EPAD）（令和 4 年 10 月より開始予定）
 - ・ 理工学研究科では、AI やデータサイエンスによる技術革新に貢献するグローバルな研究者や技術者の育成を目指した新たな高度人材育成プログラム（EPAD）の申請を行った結果、文科省から設置承認が得られ、令和 4 年 10 月から前期および後期課

程の学生募集を開始することとなっている。EPADには、理工学研究科のデータサイエンスコース、知能情報工学コース、機械エネルギー工学コース、機械システム工学コース、電気電子工学コース、先進健康科学研究科の生体医工学コースの教員が参画予定である。また、博士後期課程プログラムは、理工学研究科の数理・情報サイエンスコース、機械・電気エネルギー工学コース、バイオ・マテリアルエンジニアリングコースの教員が参画予定である。PPGAに代わる新たな外国人留学生の受け皿となるとともに、国際的な教育プログラムコースの展開を目指すものである。

- 大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)
 - ・ 佐賀大学大学院理工学研究科博士後期課程の教育プログラムで、学术交流協定に基づいて実施されている国際共同研究や国際共同教育を強化し、佐賀大学特有の実質的な国際活動を発展させるために、佐賀大学独自に奨学金制度（佐賀大学奨学金留学制度）を設け、アジア諸国から外国人留学生を博士後期課程に受入れるものである。理工学研究科博士後期課程担当の教員が参画。
- 佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）（平成13年度より）
 - ・ 佐賀大学の交流協定校に所属する学生を対象とした短期留学プログラムで、日本語コース（SPACE-J：学部生および修士課程の院生が対象）と、英語コース（SPACE-E：学部生のみが対象）がある。佐賀大学での学習や研究、また日本人学生や地域の人々とのふれあいを通じて、日本社会についての知識や理解を深めるもので、理工学部でも積極的に学生の受け入れや講義、自主研究を担当している。
 - ・ 令和3年度は交換留学生については、コロナ禍のため日本への入国ができていない。そのため、Web会議システムを用いたにライブ講義を提供するオンラインプログラムとして実施し、理工学部では3名を受け入れた。さらに、令和3年度からSPACE-SE（大学院博士前期課程・後期課程を対象）を新たに設置し、短期留学プログラムの充実を図っている。令和3年秋学期には、オンラインではあるが、3名を受け入れた。
- 佐賀大学理工学研究科博士後期課程（2021年4月～）
 - ・ 2021年4月にこれまで理学および工学の融合領域を含む学問領域の高度人材育成課程として組織していた工学系研究科博士後期課程を理工学研究科博士後期課程として改組した。本教育課程の編成の特色としては、Society5.0の推進や社会のニーズに合わせた教育の実践とともに、高度な専門的知識と論理的思考力を持って社会のグローバル化に対応できる実践力に富む人材育成を目指すものである。2021年度の募集に対して、定員20名の入学者を確保している。
- 学生の留年率、就職率、進学率の改善に対する取組み
 - ・ チューター制度をはじめ教務課・学生支援室と協力し、定期的に学生の就学状況等をチェックしつつ、コース配属から卒業まで学生に対するきめ細やかなモニタリングを実施している。また、コロナ禍で得た様々な情報発信ツール（Microsoft Teams

など)を活用し、学生との情報共有や意見交換を行うことで、理工学部全教員が一丸となって学生の留年率、就職率等の改善を進めている。

- 高大連携事業
 - ・ ジョイントセミナーは、理工学部教員が高等学校を訪問して行う模擬授業で毎年高校側の要請に応じて、ミニ講義、模擬講義、大学・学部・学科の紹介を実施している。令和3年度は一部対面実施もあったが、コロナ禍のため、原則、オンライン対応で13件実施した。
 - ・ 高大連携活動の一環として、理系分野に関心がある県内の高校生を対象に、「科学」を発見・探求できる多面的な視点を育て、自らが知らなかった自身の適性や興味・関心を見つけることを目的としたカリキュラムとして、「科学へのとびら」を実施している。令和3年度は、2回(対面1回、オンライン1回)実施している。
- 佐賀県立致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業
 - ・ 研究者招聘講座および理系ガイダンス講座等を連携して実施した。令和3年度はコロナ禍のため、オンライン会議システムを用いての実施となっている。
- 理工系女子学生の進路支援および人材育成のための広報活動
 - ・ 理工系を目指す女子学生の母数拡大を目指すため、在学生や卒業生の実情を中学生、高校生および父兄保護者を含めて、広く周知し、ダイバーシティ推進室および理工学部同窓会とともに協力しながら、広報活動を開始した。
- 環境美化エコ活動
 - ・ 光熱水量使用料金の抑制：平成18年度から使用量に応じて負担する受益者負担制度を導入、夏季および冬季の空調交互運転、エアコン、照明器具の更新に当たっては省エネタイプに切り替え、夏季および冬季の節電パトロールを実施した。

3. 評価領域別の集計及び分析

3.1. 教育の領域

3.1.1. 講義担当等に関する事項

表 3.1 に教員の担当科目数（学部、修士）、担当コマ数（半期当り換算）、卒業研究指導学生数、修士特別研究指導学生数、博士研究指導学生数（主指導）の平均値を示している。

表 3.1 教員 1 人当たりの講義担当、指導学生数

部 門	職 位	学 部 (教養教育科目を含む)			大 学 院			
		担当科目数/ 教員	担当コマ数	卒研学生指導数	担当科目数/ 教員	担当コマ数	修士学生指導数	博士学生指導数
数理	教 授	5.00	4.83	3.33	2.00	0.77	0.67	0.33
	准教授 (含講師)	5.17	5.02	2.33	1.50	1.15	0.50	0.17
情報	教 授	6.43	4.82	3.29	2.43	1.59	2.00	0.43
	准教授 (含講師)	5.83	5.26	4.83	2.83	1.63	4.17	0.83
	助 教	1.33	1.67	1.67	0.00	0.00	0.00	0.00
化学	教 授	11.91	9.92	3.55	8.36	4.30	4.73	0.73
	准教授	8.57	7.68	3.86	4.29	3.78	3.57	0.14
	助 教	8.33	7.60	3.00	1.00	1.36	1.00	0.00
物理学	教 授	6.40	6.78	3.80	2.20	1.98	2.00	0.00
	准教授	5.14	5.27	3.00	1.43	1.21	1.71	0.29
機械工学	教 授	4.75	4.15	3.63	3.25	2.28	4.75	1.13
	准教授 (含講師)	5.94	5.24	3.54	2.85	2.18	3.00	0.23
	助 教	1.67	3.33	1.00	0.33	0.02	0.67	0.00
電気電子工学	教 授	3.56	2.92	4.33	5.11	2.87	4.78	0.44
	准教授 (含講師)	5.40	6.88	4.00	2.90	2.03	3.90	0.20
	助 教	3.00	4.00	0.50	0.00	0.00	1.00	0.00
都市工学	教 授	7.36	6.45	5.18	3.09	2.66	2.18	1.36
	准教授 (含講師)	7.00	7.11	5.38	3.13	2.29	3.75	0.50
	助 教	2.00	3.00	2.50	0.00	0.00	0.00	0.00

受講生数は教務システムに登録された履修者数

授業担当コマ数は、半期当りに換算する。（通年1コマの科目は2コマとする。）1科目を複数教員で担当する場合は、実働時間とする。

【数理部門】

- 教授と准教授は概ね同数の科目を担当している。卒業研究や修士課程の主任指導に関しても、教授と准教授は概ね同数の学生を担当している。
- 博士後期課程の主旨導の有資格者として博士課程学生を指導している准教授もいる。

【情報部門】

- 教授は、学部において、准教授よりも多くの科目を担当している。また、約半数の教授が、博士後期課程の主旨導資格者として博士学生を指導している。
- 准教授は、平均として、教授よりも多くの学生指導をしている。一部の准教授は、博士後期課程の主旨導資格者として博士学生を指導している。
- 助教は主に実験指導を担当している。通常の授業科目を担当している助教もいる。
- 学生指導の人数に不均衡がみられる。

【化学部門】

- 教授は学士課程と博士前期課程をあわせて年間 20 科目程度を担当している。准教授は学士課程と博士前期課程をあわせて年間 13 科目程度であり、コマ数でも若干少ない講義担当となっている。近年、これらの担当科目数とコマ数は高い数値となっており、教員の教育負担が過度になっていることがわかる。教授・准教授は、学生実験科目も担当しているので授業のエフォートは大きい。助教は、教授や准教授に比べると授業科目の担当数が少ないが、主に実験及び演習科目の指導を担当するとともに、主要授業科目以外の科目を担当している。
- 博士前期課程の研究指導に関しては、教授と准教授はそれぞれ約 4.7 人と 3.6 人の学生を指導している。助教は、4 年次卒業研究着手時の配属学生数が教授や准教授よりも少ないので、学士課程の指導学生数は少ない。さらに、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習や生活相談など）を行っていることが報告されている。博士後期課程に関しては、主旨導の有資格者の多くは教授であるので、教授が主に博士後期課程学生を指導している。また、副指導教員となって、実質指導を行っている教員もいる。

【物理学部門】

- 平均して教授は准教授よりやや多めの授業を担当し、研究指導学生数は例年はほぼ同等であるが、令和 3 年度は教授の担当がやや多かった。博士前期課程の研究指導も同様である。
- 博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を 2 名指導している教員（准教授）がいる。
- 役職者については、負担の軽減をはかる措置を講じているが、実際はあまり軽減されていない。
- 新課程が始まった 3 年目で旧課程との過渡期であるため、理工学科共通専門基礎科目や理工学研究科の新規開講科目などの新しい科目の担当が増加し、全体的に教育

負担がましている。コロナウイルス感染拡大による授業の多様化による負担増加も大きかった。

【機械工学部門】

- 講義担当科目数について、学部科目は教授に比べて准教授が若干多く担当しているが、大学院科目は教授が准教授より多く科目数、コマ数を担当している。卒業研究の指導学生数について、教授と准教授は概ね同数を担当している。修士学生主任指導数については教授が准教授より多く指導している。これは学生の進学希望等により年度により指導学生数が変動している。准教授においては、博士後期課程の主旨指導を行っている教員もいる。
- 助教は機械工学実験Ⅰ・Ⅱ、機械工作実習Ⅰ・Ⅱなど、実験・実習の指導を担当している。

【電気電子工学部門】

- 准教授は教授よりも学部に関しては多くの科目を担当している。これは、准教授が学生実験の科目と担当しているためである。また、准教授の中に、博士後期課程の主旨指導の有資格者として博士学生を指導している教員がいる。
- 助教は主に実験指導と学部科目を担当している。指導する学生数は平均0.50人で前期後期を通じて4.00コマを担当している。また、助教の中に、博士前期課程の主旨指導の有資格者として修士学生を指導している教員、教授あるいは准教授の学生指導の支援を行っている教員がいる。

【都市工学部門】

- 教授は、学部、大学院ともに准教授よりも多くの科目を担当している。また、教授と准教授はほぼ同数の卒研学生を、大学院では教授が修士および博士学生ともに准教授よりも多くの教育指導を担当している。さらに、D○合の資格を得た准教授は主任指導教員として、博士学生の指導を行っている。助教は主に製作指導を担当している。
- 指導する学生数は卒業研究（講師以上）で平均5人強、修士指導（講師以上）で平均3人、博士主任指導（全教授と有資格の准教授）で平均1.4人である。前年に比べ、卒研指導数、修士指導数共に増加しているが、博士主任指導数は減少しており、これは、コロナ禍によって、来日できる留学生の数が大幅に減少したことによるものと考えられる。さらに、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っていることが報告されている。

3.1.2. 教育改善に関する事項

教育改善に関し、理工学部各部門の教員は、次のような取り組み、実践を行っている。

【数理部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- オンラインでの指導などを取り入れて、修士学生に修士論文を執筆させた。（教授）

- 就学上の困難を申し出た学生に対し、キャンパスソーシャルワーカーと連携してサポートを行った。（教授）
- オフィスアワーに多くの学生が質問に訪れ、彼らに丁寧な個別指導を行った。（准教授）
- 講義ノートを事前に配布して、学生が予習と復習ができるようにした。（講師）
- コロナ禍における対応として Web ページを独自に作成し、レポートの課題と解答例をアップロードした。（講師）

【情報部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- チュータ面談やレポートでの設問を通じ、学生からの意見を収集して改善点を検討（教授）。
- 学生からの相談を随時メールにて実施。新型コロナ対策で対面型の面談は出来ず（教授）。
- 学内進出企業と協力して卒業研究を実施。当該企業の間で共同研究契約を締結（教授）。
- 地元 IT 企業および佐賀市と協力したイベントの授業の一環としての取り組み（教授）。
- 地元企業と佐賀県と協力した大学院講義（教授）。
- 改良型ハイフレックス方式を活用した授業改善活動（准教授）。
- プログラミングコンテスト（教授）。
- 担当授業での Moodle 活用を推進し、大福帳を活用した学生とのコミュニケーション促進およびその結果に基づく授業改善（准教授）。

【化学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 対面かつ、演習を学生本人に説明してもらうことで実践的な学力を培うことができた。（教授）
- 毎回の講義でオンラインテストを用意して、学生の自主的な授業外学習を促すことができた。著作権に配慮したうえで毎回の講義資料を配布した。（教授）
- e-learning による予習課題と復習課題については理解力の助けになった。（教授）
- 昨年度からのコロナ禍で作成した講義の動画ファイルや定期試験の解説動画等の公開が有効であった。（教授）
- 演習を行い、学生の理解度に関する情報を得た。（准教授）
- 質問を講義時間外で受け付けることで、理解度が向上した。（准教授）
- 昨年度の動画を参考資料として受講生に紹介し、学生が予習・復習できるように努めた。（准教授）
- コロナ禍の影響で対面とオンデマンド授業を併用した。（准教授）

- 講義内容の定着を図るために演習も実施した。演習の提示・提出は Microsoft Teams を用いて実施した。(准教授)
- メールでの質問にできるだけわかりやすく回答を行った。(准教授)
- 毎回演習に時間を設けて、問題を解かせるようにした。(教授、助教)

【物理学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- LMS を活用している(教授)。eラーニングを実施した(教授、准教授)。
- 時間外学習が可能なようにテキストなど教材を作成し、学生に提供している。(教授)
- グループ学習を取り入れている。(准教授)
- 授業用の動画を作成した。(教授、准教授)
- シラバスに自習課題を記載している。さらに、原則として毎回演習を行い、答案を回収し、解答例を配布している。(教授)
- 1年次の共通教育科目で、毎回の授業の後に共同担当で会合を開き、授業の改善について議論している科目がある。(教授、准教授)
- 成績不振者に対して、補習、再試験を行い挽回の機会を与える科目もある。(賛否両論あるため、教員個人に判断は任されている)

【機械工学部門】

令和3年度は、前後学期とも基本対面授業の措置が取られた。教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 遠隔により講義・発表を行い、問題なくこれらを行うことができた。
- 前年度にコロナ対策として用意した講義資料(動画)を講義の予習として活用した。
- コロナ禍の影響に対応できるように全ての授業を対面とリモートのハイブリッドで行った。また、定期試験及び再試験は対面で実施した。
- シラバスどおりに授業を進めた。学生からの質問には全て答えた。
- 今年度は Microsoft Teams を使って講義を行った。Microsoft Teams では それ自身のシステム中に課題を提示したり 放課後にチャットで質問できたりするので学生との距離が縮まった気がした。締め切り前日の深夜に質問がくることもあった。
- パワーポイントを用いて講義を行ったが、重要な項目については、その重要度に応じて文字の色、フォントなどを変えることで視覚的にも訴えた。
- 適宜ビデオや映像などを用いることで重要な点を明確にした。
- 講義の最後に、その日の講義中で最も重要な項目について小テストを行った。
- 次の講義の冒頭に、前回行った小テストを返却し、解答を示しながら解説を行った。
- 前回の講義に欠席した受講生への講義内容の周知と、前回の講義に出席した受講生への復習を目的として、小テストの返却中に前回の講義で用いたパワーポイントを自動的に映写した。

- 実験、講義科目ともに新型コロナウイルス対応にも配慮しつつ、学生が効果的な学習ができるように配慮した
- 対面とオンデマンドを併用して授業を実施した。
- オンデマンドによる説明動画の視聴も併用することで、実験場所での測定時間と説明を短縮したが、十分に実験の経験をできるように配慮した。
- 新型コロナウイルス対応のため、実験場所でのテーブル数を増やして学生同士の間隔を確保した。
- 講義や教科書で得られた知識に留まらず、実験を通しての体験を伴った知識として獲得できるように配慮して流体力学および熱力学に関する各実験テーマを選定した。
- 自分の考えを要領よく相手に説明できるようになるためにプレゼンテーションの時間が設定した。
- 新カリ学生の学力が低いと判断していたので、あえて教科書を熟読するような授業にした。学力を有する学生は論理的な思考ができ授業到達目標を実現していた。
- コロナ禍であったが、新型コロナウイルス感染に気を配りながら対面授業を行うことができた。
- 予習を促し、授業を円滑に進めるために、シラバスを配布すること、授業内容に対する理解を深め、学習効果を高めるために、適宜に演習を課すること、期末試験のほかに中間試験等を実施することを行った。
- 機械システム工学実験については、今年度・前学期は、新型コロナウイルス感染症対策に十分留意して、対面で講義を行った。シラバスに記載のとおり、当該科目の成績評価は、全講義の出席を前提とした。Microsoft Teams を使って、予め、実験内容を解説した。
- 班を2パートに分けて、実験の講義やプレゼンテーションでの蜜を避けた。
- 関連事項の説明や課題の提示を、概説の時間や、Microsoft Teams での実験説明や演習課題の際、実施した。
- Microsoft Teams で実験結果を共有、データ整理することで、講義への理解を深めさせた。
- Microsoft Teams の課題経由で提出されたレポートは、考察・結論の妥当性・独自性を、主に評価した。
- 個別に提示した実験課題に関するプレゼンテーションは、対面で行い、情報発信能力、コミュニケーション能力を養い、実験の発展的な理解に努めさせた。
- 新型コロナウイルス感染症対策に十分留意して、15回全て、対面式で実施した。
- 感染症対策としては、手指消毒やマスク着用の注意喚起以外に、着座間隔に配慮して受講生、一人一人の席を、Microsoft Teams を使って、事前にアナウンスした。
- 出席状況は、全て、入退室管理システムを利用するよう周知した。なお、学生証を忘れた場合、講義終了後、申し出るように伝達した。

- 受講学生が主体的な学習に取り組めるよう、講義の事前資料配布や講義後の演習課題提示・提出、定期試験の解説など、Microsoft Teams と Microsoft Forms を使って、行った。
- 授業とも新しく作成した資料を更に充実させた。突然のオンライン授業要請にも対応した。
- コロナ禍ではあったが、大学の指示に従って対面にて授業を行った。授業内容の理解が深まるよう努めた。
- 実際に実験を行った。コロナのため一部実施できない項目があったがオンラインでの資料の利用で補うことができた。
- 毎回の講義について、学生意見を取った。講義に黒板、プロジェクター等を十分使って講義の内容をシラバス通り学生に説明した。
- 必要なプリント及び授業ノートを学生に完全に配布した。
- 講義の内容における多くの演習・実習行われた
- 講義ノート等を電子メールによって各学生に事前に送った。
- 理工学部 1 年次における必修科目であり、いずれのコースに進む学生にとっても、2 年次以降の各基礎科目への土台となる講義であるため、その重要性は極めて高い科目である。全ての学生が本科目の要求を満たす学力を身につけられるよう配慮した。合格率は高い水準にあり、大半の学生が要求される水準に達していたものと判断できる。
- 全ての学生が本科目の要求を満たす学力を身につけられるよう配慮した。
- 毎週実施する演習課題についても、昨年度導入した e ラーニングにより、効果的な反復学習の機会を与えることができたため、2019 年度以前と比較してより高い演習の効果が得られた。
- 金属材料を中心と機械材料の基礎について講義するとともに、その関連技術および環境問題との関連について概説した。主に機械材料の概要と環境との関わり、環境問題を考慮した材料評価へのアプローチについて、平易に解説した。
- 単なる機械材料に関する知識の習得だけではなく、環境に配慮した材料の活用の重要性と、現代の工学が抱える課題について、受講者に意識付けすることができたことが、本講義の優れていた点である。
- 機械エネルギー工学実験について、オンラインとオンサイトをハイブリッドで実施した。実験の説明、内容については前者を実際の実験は後者を用いた。
- オンデマンドにより資料を予め配布することで、実験時間の短縮とより深い理解を支援することが出来た。
- レポートのやり取りをオンラインで実施することにより、時間厳守と濃厚なやり取りが出来た。
- 学生主導で実験を進めていること理解しやすいように教え方や教材の工夫をした。

- 学生が主体的に学べるよう他者と一緒に「書く」、「話す」、「発表する」といった活動を行った。
- 課題等の提出物に対して適切なフィードバックや解説を行った。
- 学部の担当授業では、履修者の理解を深める授業を実施でき、また、アクティブラーニングを取り入れ、履修者が能動的に内容を理解できるように工夫を施した。
- 教育効果に配慮しつつ、オンライン講義と対面授業の両立に努めた。
- オンラインの場合もライブ形式の講義を実施し、従来と変わらない講義の質と量を保証できるように努めた。対面で実施した実習系授業では感染対策のため、少人数ごとに出席させるなどの工夫を行った。
- 高校からの接続を意識し、高校と重複する内容をより深く学習できるよう工夫した・大学で新たに学ぶ内容は原理原則から丁寧に解説することを心掛けた
- 原則対面形式とし、状況に応じてオンラインを併用したハイブリッド形式での実施。三密を避けた対面での作業、理解度を高めるための Microsoft Forms を用いたレポート提出。インカム、ヘッドセットを用いたライブ授業を行った。
- 各種数学的解法の数値的な計算法について基本原理の説明に加え適宜演習を挟みながら講義を行い、内容の十分な理解と修得を目指した。
- 機械工学の専門科目との関連性について説明を加え、学生の学習意欲の向上に努めた。

【電気電子工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 昨年度実施の講義内容と講義後の質問等を鑑みて、シラバスを再考し、不要と思われた項目を削除して、開講前に補助すべき項目を充実させた。（教授）
- Web ページの見直しを行い、昨年度のライブ講義の動画のリンクも追加して、受講者の便宜を図った。（教授）
- 学生への質問等を行い、学生に考えさせ発表させる時間を多くとった。（准教授）
- 課題等の提出物に対して適切なフィードバックや解説をした。（教授）
- 例年に比べ、講義をビデオに録画して復習しやすくした。（准教授）
- 当初予定していた教科書の他に、より初心者向けの教科書を参考に講義内容を組み立て、初めて回路を勉強する学生にも理解しやすいように工夫した。（准教授）
- 電気電子工学共通実験 I では、オンデマンドとの複合方式とし、実験室での実験を行う人数を制限して実施した。（准教授）
- 放電特性に関する実験では、高電圧を取り扱う際の安全教育についても着目して指導を行った。（助教）
- Microsoft Teams、Microsoft Teams を用いたオンラインで課題提出、採点等のシステムを駆使することにより、時間の効率化を行うことができた。（准教授）
- 講義動画を日本語版と英語版の両方を作成することで、日本人、外国人留学生の双

方が深く理解できるように努めた。(教授)

- 昨年度作成済みのオンデマンドビデオを活用することで、入構制限、まん延防止措置等の影響で対面受講できない学生に対しても、遅滞なくオンライン受講できるようにした。(教授)

【都市工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。なお、本年度も昨年度に引き続き、コロナ禍におけるオンライン授業に関する対応とその効果に関するものが多い。また、コロナ2年目となり、前年に作成したオンラインコンテンツの効率的な利用などについての記述も多くみられた。

- Microsoft Teams で全てのプリント、ビデオ等を配信するようにした。また、Eラーニングを活用して小テストを行うことができるようにした。その結果、履修生は資料を入手しやすくなり、かつ復習しやすくなった。(教授)
- 演習は極力対面で行い、学生との意見交換を行った。そして、外部講師を招待して、講演会ならびに学生の発表・質疑・意見交換を行った。これにより、学生は最先端で行われている建築に触れることができ、かつ、外部講師からの刺激を受けることができた。(教授)
- ネット授業では、学生の飽きが来ないように、映像による視覚的な教材の作成とともに、教員から学生を指名するなどして、一定の緊張感を持たせながら対応した。(教授)
- 毎回の講義では、前回の講義復習を兼ねてクイズを実施し、自らの理解度をチェックさせた。(教授)
- 板書と資料提示装置の組み合わせにより、学生の理解度を高めている。小テストで常に学生に理解度の確認をさせている。(教授)
- オンデマンド型で準備した授業コンテンツを効率よく利用することができた。(教授)
- 受講生におけるオンラインスキルの維持向上も図っている。同ウェビナーの「課題」機能および携帯電話等による pdf 化ツールを駆使することにより、紙ベースによる受講生との間のノート、課題のやり取りに伴う新型コロナウイルスの授受の可能性について予防している。(教授)
- 地方創生インターンシップにおいて、チーム制のもと、企業担当者が提示する課題に対する企画提案や共同制作を含めた研修など、受講生による主体的な取り組みを行った。(教授)
- 5月初旬から末頃まで、大学入構禁止となり対面での実施ができなかったが、昨年度に作成した動画資料があったため代用することにより、授業に進行に支障をきたすことは無かった。(助教)
- 対面と同時中継型講義形式をうまく組み合わせたうえ、講義用のホームページを作

成し、講義資料と講義動画をリアルタイムにアップロードし、演習課題とレポート課題の作成指導を含め、講義時に発生・気づいた問題をできる限り早期改善を図り、一定の効果が得られた。(准教授)

- 映像などのマルチメディアの手法を取り入れ、さらに1つのトピック(およそ3回の講義)ごとに、学生によるプレゼンテーション発表演習とディスカッションを実施し、講義に対する理解度の向上並び習得した専門知識の応用においては、一定の効果が得られた。(准教授)
- 対面/オンラインの講義形式に関わらず講義内容を動画として保存していたことで、復習における有用な教材として学生が利用できたようである。アンケートや試験結果から従前よりも理解度の改善されている結果が示された。(講師)
- 日本人学生が PPGA 学生と共に学ぶ力を向上させるために講義の配布資料は全体的に英語を用いて、重要な部分には日本語の説明も表示する。事前に資料を配布し、内容を予習する時間を確保した。(准教授)
- オンラインコンテンツの充実を図ることができた。対面型の授業ができたことにより、TA を活用した演習を行うことができた。(准教授)
- コロナウイルス問題への対応として、交代制を導入して対面講義による受講人数を絞った上で、オンラインの学生向けに演習問題と解説資料の作成を行った。(教授)
- 対面授業では実現が難しい建築家など実務者のレクチュアやゲストクリティークに参加いただくなど、オンラインを有効に活用し授業を進められた。(准教授)
- サブフィールド PBL では、現地見学を予定していたが、急遽授業担当者による現地での動画視聴に変更した。動画視聴の上、自身で事例を取り上げ考察させたので、より主体的に取り組む(取り組まざるをえない)授業になったと思う。また、オンラインだと他の人のレポート発表資料の共有がしやすくメリットに感じている。(准教授)

3.1.3. 教育研修・FDに関する事項

教育研修・FDについて、理工学部各部門の教員は次の活動を行っている。

【数理部門】

- 部門内での FD 活動の他、理工学部 FD 講演会、全学教育機構 FD 講演会に参加した。

【情報部門】

- 理工学部 FD 講演会
 - ダイバーシティ推進、学術コンサルティング制度、著作権、将来構想
- 全学教育機構 FD
 - SDGs 教育の動向と課題

【化学部門】

- 理工学部 FD 講演会「将来構想検討タスクフォース答申」(教授、准教授、助教)

- 著作権に関する FD 講演会「佐賀大学教員向け 授業内著作物利用セルフチェックシートの使い方」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会「学術コンサルティング制度について」(教授)
- 理工学部 FD 講演会「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会、ダイバーシティ推進室「変わる研究開発環境 -リサーチトランスフォーメーション-」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会「令和元年度決算に関する参議院決議に伴う対応(文部科学省通知)への対応について」(教授、准教授、助教)
- 九州地区大学教育研究会(教授)
- 大学法人等評価実務担当者説明会(教授)
- PROG 試験結果を踏まえた FD 講演会(教授)
- 令和3年度国立大学法人佐賀大学公正な研究活動の推進に関する講演会「大学における研究を通じた人材育成に思うこと」講師：三島 良直 氏(国立大学法人東京工業大学 前学長)(教授、准教授)
- 肥前セラミック研究センターFD 研修会(ニッカトー見学会)への参加(教授)
- 佐賀大学 FD 講習会「SDGs 教育の動向と課題」への参加(教授)
- 肥前セラミック研究センターFD 研修会(センター開発の新素材について)の開催および参加(教授)
- FD 講演会：FD 講習会「学生アンケートを元にした遠隔授業の好事例の紹介」(教授)
- 2021 年度情報セキュリティ講習会～標的型攻撃メール対応訓練フォローアップ～(教授、准教授)
- 令和3年度佐賀大学 FD 講習会「インタラクティブなハイブリッド授業を実現する Webex の新機能-Slido-」(教授)
- 令和3年度研究支援に関する FD・SD 講演会(教授)
- 令和3年度佐賀大学ダイバーシティ推進室シンポジウム「変わる研究環境とダイバーシティ-10年後の未来に向けて-」(教授)
- 研究費不正使用防止に関するコンプライアンス研修会(講師：EY 新日本有限責任監査法人 公認会計士 宮本香氏)(教授、准教授、助教)

【物理学部門】

- 全員が簡易版ティーチングポートフォリオ(TP)を作成しており、一部の教員が標準版 TP を作成している。
- 理工学部 FD 講演会に参加した(教授、准教授)。
- 大学が開催する FD 講演会に参加した(教授、准教授)。
- 韓国延世大学とのパートナーシッププログラムにおいて中心的な役割を果たし、大学院生向けに講義を行うとともに、参加者と学术交流をはかった(准教授)。

【機械工学部門】

- 部門内に設置した教務・JABEE グループによる JABEE 基準適合対応、学部および大学院の教務関連事項の検討
- 学部 FD 講演会への参加
- 大学 FD 講演会への参加

【電気電子工学部門】

- 令和3年度佐賀大学苦情クレーム対応 e ラーニング研修（教授、准教授）
- 2021 年サイバー事件回顧録 ～技術と法制度の両面から～ 情報処理学会全国大会（准教授）
- FD 研修「カナダ・サスカチュワン大学教育法専門家によるアクティブラーニング、異文化コミュニケーション FD/SD」（教授）
- FD 講演会「Microsoft 365 を活用した PBL 型オンライン授業」（准教授）
- FD 講習会「学生アンケートを元にした遠隔授業の好事例の紹介」（教授、准教授）
- LGBTs ～多様な性のあり方を考える～（教授）
- PROG 試験結果を踏まえた FD 講演会（教授、准教授）
- 研究費不正使用防止に関するコンプライアンス研修会（教授、准教授）
- 研究力向上セミナーPART I 「アカデミックプレゼンテーションセミナー 競争の激しい学術界で成功するために」（教授）
- 研究力向上セミナーPART I 「英語論文執筆セミナー 競争の激しい学術界で成功するために」（教授、准教授）
- 研究力向上セミナーPART II 「ポイントで学ぶ英語論文セミナー（応用編）」（教授）
- 研究力向上セミナーPART II 「国際会議での英語プレゼンテーション:準備と実践」（教授）
- 佐賀大学 FD 講演会「SDGs 教育の動向と課題」（教授、准教授）
- 佐賀大学 FD 講習会「インタラクティブなハイブリッド授業を実現する Webex の新機能-Slido-」（教授、准教授）
- 女性研究者の公平な昇任昇格制度改善プロジェクト（教授）
- 総合分析実験センターの FD・SD セミナー「最高のユーザビリティを備えた光シート蛍光顕微鏡」への参加（准教授）
- 総合分析実験センターの FD・SD セミナー「試薬の安全な取り扱いについて」への参加（准教授）
- 第 12 回標準版ティーチング・ポートフォリオ更新ワークショップ（准教授）
- 第 1 回肥前セラミック研究センターFD・SD 研修会（助教）
- 第 1 回起業家育成FD 講演会「起業成功のノウハウ」（教授）
- 第 2 回起業家育成FD 講演会「クラウドファンディングと資金調達」（教授）
- 第 3 回起業家育成FD 講演会「ベンチャー企業と起こす地域のイノベーション」（教

授)

- 第4回起業家育成FD講演会「佐賀県内大学発ベンチャーの取り組み」(教授)
- 第5回起業家育成FD講演会「大学発ベンチャーと知的財産」(教授)
- 第6回起業家育成FD講演会「クラウドファンディング戦略と実践」(教授)
- 著作権に関するFD「佐賀大学教員向け 授業内著作物利用セルフチェックシートの使い方」(教授、准教授)
- 理工学部FD講演会「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」(教授、准教授)
- 理工学部FD講演会「学術コンサルティング制度について」(教授、准教授)
- 理工学部FD講演会「将来構想検討タスクフォース答申」(教授、准教授、助教)
- 理工学部FD講演会「変わる研究開発環境 -リサーチトランスフォーメーション-」(教授、准教授)
- 理工学部FD講演会「令和元年度決算に関する参議院決議に伴う対応(文部科学省通知)への対応について」(教授、准教授)
- 令和3年度佐賀大学「研究支援に関するFD・SD研修会」(教授)
- 令和3年度「科学研究費獲得に向けた講演会」(准教授)
- 令和3年度ダイバーシティ推進室シンポジウム「変わる研究環境とダイバーシティ -10年後の未来に向けて-」(准教授)
- 令和3年度佐賀大学公正な研究活動の推進に関する講演会「大学における研究を通じた人材育成に思うこと」(教授、准教授)
- 令和3年度情報セキュリティSD講習会「2021年度情報セキュリティ講習会～標的型攻撃メール対応訓練フォローアップ～」(教授、准教授)
- 令和3年度第1回さがん国際フォーラム(教授、准教授)

【都市工学部門】

- 理工学部FD講演会「将来構想検討タスクフォース答申」
- 著作権に関するFD「佐賀大学教員向け 授業内著作物利用セルフチェックシートの使い方」
- 理工学部FD講演会「学術コンサルティング制度について」寺本理事による説明会
- 理工学部FD講演会「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」
- 理工学部FD講演会【第1部】ダイバーシティ推進室「変わる研究開発環境 -リサーチトランスフォーメーション-」
- 理工学部FD講演会【第2部】総務部総務課「令和元年度決算に関する参議院決議に伴う対応(文部科学省通知)への対応について」
- 理工学部FD講演会「SDGs教育の動向と課題」
- オンライン開催「令和3年度国立大学法人 佐賀大学公正な研究活動の推進に関する講演会」

- 令和3年度「科学研究費獲得に向けた講演会」
- 令和3年度 佐賀大学「研究支援に関するFD・SD研修会」
- FD講習会「学生アンケートを元にした遠隔授業の好事例の紹介」
- 令和3年度第1回さがん国際フォーラム
- 学術コンサルティング制度について
- 令和3年度研究倫理教育教材「eAPRINプログラム」修了
- ハラスメント防止eラーニング研修の受講
- Academic Writing
- Academic Presentation
- ポイントで学ぶ英語論文セミナー（応用編）
- 講演会「LGBTs-多様な性について考える-」
- 国際会議での英語プレゼンテーション:準備と実践
- 2021年度情報セキュリティ講習会～標的型攻撃メール対応訓練フォローアップ～

3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項

オフィスアワーの設置と学生の訪問については、理工学部内の全ての教員が行っている。部門ごとの相談内容やその対応については、以下のとおりである。

【数理部門】

- 相談内容は学習方法や将来の進路に関するものが多い。（教授、准教授、講師）

【情報部門】

- LPを活用したチュータ指導
- チャットツールを用いたオンラインによる指導

【化学部門】

- オフィスアワーは全教員が設定しており、学生の訪問に対応している。（教授、准教授、助教）
- オフィスアワー以外の時間においても、教員は学生の訪問・相談に適宜対応している。（教授、准教授、助教）
- 学生からのメールによる相談についても対応している。（教授、准教授、助教）
- 毎学期毎に担当学生全員に対し、ラーニング・ポートフォリオを活用したチューター一面談を実施している。（教授、准教授、助教）
- 学生の訪問・相談は、コース主任や教務委員、教育プログラム委員長、就職担当教員などに対するものが多い。（教授、准教授）
- 授業に関する質問が最も多く、その他履修上の相談や就職に関する相談・報告、進路等の相談など多岐にわたる。（教授、准教授、助教）

【物理学部門】

- 成績不振者を学科全体で把握しチューターを中心に、学生（時には両親）と面接す

るなど、学生の学習体制の改善をはかり、留年率を下げるための努力に取り組んでいる。

- 進路不明者を出さないために、指導教員を中心に就職担当と協力し学生の就職、進学支援を行っている。
- 学生のオフィスアワーでの相談率は1割程度と低く、オフィスアワー制度があまり有効に機能していないように思える。ただ、大半はオフィスアワー以外での訪問をしている。

【機械工学部門】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。
- 相談内容のほとんどは就職・進路相談と学修相談についてであるが、一部の学生から日常生活に関する相談もある。

【電気電子工学部門】

- 相談内容は授業科目や試験関連、実験レポートの質問に関するものが多い。休学等の在籍についての相談もある。（教授、准教授、助教）

【都市工学部門】

- 各教員が設定した時間帯はもちろん、研究室学生については、適宜全教員が行っている。
- 相談内容は学修相談および進路相談に関するものが多い。
- 教職チューターによる学生面談や過年度生や学生保証人との面談なども随時実施されている。
- 面談方法は、対面、電話、資料送付など、できるだけ学生に寄り添えるように配慮されている。

3.1.5. 学生の受賞等

【情報部門】

- JSiSE 学生研究発表会 優秀発表賞（指導教員：准教授）
- 第7回佐賀さいこう企業表彰（指導教員：准教授）
- さがラボチャレンジカップ 2021 最優秀賞（指導教員：准教授）
- 九州経済産業局長賞（指導教員：准教授）

【化学部門】

- 日本分析化学会九州支部 2021年度九州分析化学ポスター賞（指導教員：教授）
- 繊維学会西部支部 若手研究者奨励賞（指導教員：教授）
- 第31回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会ポスター賞（指導教員：教授）
- 令和3年度物理化学インターカレッジセミナー 兼日本油化学会界科学部会九州地区講演会 優秀講演賞（指導教員：准教授）
- 化学工学会九州支部 優秀ポスター賞（指導教員：准教授）
- The 8th Asian Particle Technology Symposium (APT2021) Excellent Poster

Award (指導教員：准教授)

- 公益財団法人 加藤科学振興会の研究奨励金 (指導教員：教授)

【物理部門】

- アーバンデータチャレンジ 2021 最終審査会銅賞 (学部3年生)

【機械工学部門】

- 日本機械学会 畠山賞
- 日本機械学会 三浦賞
- 日本設計工学会 武藤栄次賞
- 計測自動制御学会 優秀学生賞
- 自動車技術会 大学院研究奨励賞
- 2021 年度精密工学会九州支部「第 22 回学生研究発表会」ベストプレゼンテーション賞
- 2021 年度精密工学会九州支部「第 22 回学生研究発表会」企業賞

【電気電子工学部門】

- ICST2021・Best paper award (指導教員：教授)
- IEEE AP-S Japan・Student Encouragement Award (指導教員：教授)
- ICETC2021・Best paper award (指導教員：教授)
- 映像情報メディア学会放送技術研究会・学生発表部門 最優秀賞(指導教員：教授)
- 応用物理学会九州支部・Best Presentation Award for Young Researchers (指導教員：教授)
- 電子情報通信学会九州支部・令和 2 年度連合大会講演奨励賞 (指導教員：教授)
- 電子情報通信学会九州支部・令和 2 年度連合大会講演奨励賞 (指導教員：教授)
- 電子情報通信学会九州支部・2021 年度成績優秀賞 (指導教員：教授)
- 電子情報通信学会九州支部長表彰 学術奨励賞 (指導教員：教授)
- 理工学部同窓会長賞 (指導教員：教授)
- 電気学会九州支部長賞 (指導教員：教授)
- 計測自動制御学会 SICE 優秀学生賞 (指導教員：准教授)

【都市工学部門】

- 日本コンクリート工学会九州支部長賞 (指導教員：教授)
- 2021 年度土木学会西部支部研究発表会優秀講演賞 (指導教員：教授、准教授)
- 第 9 回九州橋梁・構造工学研究会シンポジウム優秀発表賞 (指導教員：教授)
- トウキョウ建築コレクション 2022 ファイナリスト・ベスト 11 選 (指導教員：准教授)

本年度もコロナ禍による各種学会の開催中止が相次ぎ、学生による研究成果の発表の場が制限され、学生受賞件数に影響を与えた可能性は否定できないといえる。

3.2. 研究の領域

3.2.1. 著書、論文等の発表実績

過去5年間（2017.4.1～2022.3.31）の発著書、論文等の発表実績を表3.2に示す。

表3.2 過去5年間（2017.4.1～2022.3.31）の発著書、論文等の発表実績平均値

学科	職 種	著書	論文総数		和文原著		英文原著	
				査読付		査読付		査読付
数理部門	教 授	0.00	4.00	3.67	0.33	0.00	3.67	3.67
	准教授 (含講師)	0.00	4.33	4.00	0.17	0.17	4.17	3.83
情報部門	教 授	1.43	14.43	14.71	1.29	0.71	13.14	14.00
	准教授 (含講師)	0.00	17.67	17.67	1.67	1.67	16.00	16.00
	助 教	0.00	1.67	1.67	0.33	0.33	1.33	1.33
化学部門	教 授	1.27	16.64	16.45	0.45	0.36	16.09	16.09
	准教授	1.14	17.57	16.86	1.00	0.29	16.57	16.57
	助 教	0.00	4.33	4.33	0.00	0.00	4.33	4.33
物理学部門	教 授	0.40	6.00	6.00	0.40	0.40	5.60	5.60
	准教授	0.00	66.71	66.29	0.00	0.00	66.71	66.29
機械工学部門	教 授	0.75	22.13	20.75	2.25	0.88	19.88	19.88
	准教授 (含講師)	0.46	12.38	10.77	3.15	1.85	9.23	8.92
	助 教	0.00	2.33	2.00	0.67	0.33	1.67	1.67
電気電子工学部 門	教 授	0.67	20.67	20.56	1.89	1.78	18.78	18.78
	准教授 (含講師)	0.30	7.60	7.60	1.80	1.80	5.80	5.80
	助 教	0.00	7.00	7.00	1.00	1.00	6.00	6.00
都市工学部門	教 授	0.27	14.91	12.91	4.55	2.64	10.36	10.27
	准教授 (含講師)	0.75	9.75	4.75	8.38	3.38	1.38	1.38
	助 教	0.50	17.00	5.50	11.50	1.50	5.50	4.00

【数理部門】

- 教授、准教授の研究活動は平均的に見てかなり良好である。

【情報部門】

- 教授、准教授ともに、活発に研究成果発表を行っている。原著論文は、英文での発表が主要となっている。
- 助教については、英文論文を中心に活発に発表を行っている者もあるが、個人差が大きい。

【化学部門】

- 教授の研究活動は良好である。従来よりも大学運営の負担増加にも関わらずに平均して良好な研究活動が維持されている。審査付論文に約 16 報（5 年間）を報告している。
- 准教授の研究活動は良好である。准教授の教育負担も確実に増加しているが審査付論文に約 17 報（5 年間）を報告している。
- 助教の研究活動は活発とは言えない状況であり、査付論文に約 4 報（5 年間）を報告している。

いずれの教員も審査付国際論文への投稿が大部分である。和文の論文は学会などから依頼された総説類と推察され、和文論文でも国内学会にはそれなりの貢献を果たしていると考えられる。昨年度と同様に本年度も准教授の論文数が教授よりも高く、研究活動が高いレベルで維持されていることが判断できる。今後の化学部門の発展のためには助教の研究活性化が必要と思われる。

【物理学部門】

- 教授の研究活動は個人差があるが、平均として高い水準にある。
- 准教授の研究活動は個人差があるが、高いアクティビティを示している。特に、准教授一名の大型共同研究論文（400 編以上）が論文数を押し上げている。
- ほとんどの論文が英文で書かれ、査読付きである。研究に関しては国際化が進んでいる。

【機械工学部門】

- 教授の研究活動は、概ね良好な研究活動が継続的に行われていると評価できる。
- 准教授の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。
- 助教の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。

【電気電子工学部門】

- 教授の研究活動は、博士後期課程学生の博士号認定資格を維持している。論文総数の平均は約 4.1 編／年であり、その 90.9%は英文論文であり、また英文論文のすべてが査読付きの業績であることから、質の高い研究成果を発表していると評価できる。
- 准教授の研究活動は博士前期課程学生の修士号認定資格を維持している。論文総数

の平均は約 1.5 編／年である。教員により論文の発表実績のばらつきが大きい。

- 助教の研究活動は博士前期課程学生の指導資格を概ね維持している。論文総数の平均は約 1.4 編／年であり、すべて査読付きであるとともに、85.7%が英語原著論文である。

【都市工学部門】

- 教授の研究活動は著書や査読付き論文で大きな成果を挙げている。ただし、毎年の傾向ではあるが、論文数の個人差が大きい。この原因としては①研究分野の特性による。②博士後期課程の指導学生数が多い教員に査読付き論文数が集中する傾向にある。③教員不補充と新カリキュラム施行による教育負担の大幅な増加、等が考えられる。
- 准教授・講師の研究活動は著書数および査読付き和文原著で教授を上回っている。教授同様、准教授・講師の論文数では個人差が大きい。
- 助教の研究活動は、現状 2 名（1 名は本年度後学期着任のプロジェクト助教）のみなので、部門の傾向としてのコメントは差し控える。
- 全体として、昨年に引き続き減少傾向にあり、特に英文原著に関しては、コロナ禍において、国際会議が中止になったケースが多かったことも影響していると考えられる。

3.2.2. 共同研究などに関する活動実績

【数理部門】

- 外国人研究者とオンラインで共同研究を行った。（准教授）
- 国内の他大学の研究者と共同研究を行った。（講師）

【情報部門】

- 「佐賀大学 SDGs プロジェクト研究所」を通じた共同研究（教授）
- 地元企業との共同研究（教授、准教授）
- 理工学部重点プロジェクト（准教授）
- 他学部との共同研究（教授）
- 他大学・研究機関との共同研究（教授、准教授）
- 民間企業との共同研究（准教授）

【化学部門】

科学研究費補助金に新規・継続合わせて 6 件が採択されている（研究代表者のみ）（教授・准教授）

民間企業や産業技術総合研究所等との共同・受託研究や寄附金が 12 件ある

- 佐賀市からの受託研究（教授）
- 国立研究開発法人科学技術振興機構からの受託研究（教授）
- 国立研究開発法人日本原子力研究開発との共同研究（教授）
- 佐賀県畜産試験場との共同研究（教授）

- 国立研究開発法人 産業技術総合研究所との共同研究（准教授）
- 民間企業との共同研究（教授、准教授、助教）
- ガジャ・マダ大学（教授）
- ドレスデン工科大学（教授）
- 遼寧大学（教授）
- オクラホマ州立大学（教授、准教授）
- アルメリア大学（准教授）

【物理学部門】

- 国際リニアコライダー計画の共同研究（准教授）
- ALICE 実験（素粒子物理学の国際共同実験）に参加（准教授）
- 佐賀大シンクロトロンでの共同研究（准教授）
- 佐賀大学シンクロトロン、理化学研究所、弘前大学、NSRRC、九州大学、熊本大学との共同研究（准教授）
- 東京理科大学、日本大学、九州産業大学との共同研究（准教授）
- 佐賀 Light Source の佐賀大学ビームライン実験課題、KEK フォトンファクトリーの実験課題に代表者として採択（准教授）
- 財団の助成金の獲得（准教授）

【機械工学部門】

- 国、独立法人、民間等からの受託研究（教授、准教授）
- 国内の大学からの受託研究（教授、准教授）
- 独立法人、民間との共同研究（教授、准教授、助教）
- 国内外の大学との共同研究（教授、准教授）
- 民間、財団法人等からの教育研究助成（教授、准教授、助教）

【電気電子工学部門】

- 民間企業との共同研究（教授、准教授、助教）
- 佐賀県との共同事業（教授）
- 独立行政法人国際協力機構 ABE イニシアティブ受入（教授）
- 公益財団法人からの研究助成受入（教授）
- 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構からの受託研究（助教）
- 国立研究開発法人科学技術振興機構からの受託事業（教授）

【都市工学部門】

- 登録特許について実施料収入があった（教授）
- 佐賀大学を中心とする「有明海地域共同観測プロジェクト(COMPAS)」に参画して、共同研究を実施した。（教授）
- 佐賀大学 SDGs プロジェクト研究所の「地域防災減災研究プロジェクト」に参画して、地域貢献を目指した研究活動を行っている。（教授、准教授）

- 民間等の受託研究（高橋財団）および佐賀大学SDGsプロジェクト研究所代表として、在来知歴史学また中国との学術交流活動をオンライン会議等で実施した。また、低平地研究会幹事長として、各種の取り組みに参画した。（准教授）
- SDGsプロジェクト研究所ICTまちづくりデザインプロジェクト、理工学部研究会コミュニティデザイン研究会を主宰し、大学間・学部間・学科間の研究プロジェクトを推進した。（教授）
- 佐賀大学地域連携プロジェクト・鹿島プロジェクトの代表を務めて、学部横断的な関係づくりを行なった。低平地研究会の運営委員長として会を取り仕切った。（教授）
- 鹿島市役所の要請を受け、有明海漁協組合員関係者に科研費で取り組む有明海の水質に関する調査結果を報告し、研究成果を地元還元した。（教授）
- 佐賀大学 SDGs プロジェクト研究所在来知歴史学プロジェクトの組織運営ならびに国際シンポジウム実行委員長としてシンポジウムを佐賀大学・福岡大学の共同で開催できた。（教授）
- 令和3年度から新しく SDGs プロジェクト研究所地域防災減災研究プロジェクトを立ち上げ、プロジェクト長として全体をまとめるとともに、佐賀県内地域防災研究連絡会議の立ち上げと年2回の開催を行うことができた。（教授）
- 協和製作所との共同研究（教授）
- 明治大学大学院 I-AUD イブニングレクチャーに招聘され、海外の研究者・学生との議論を行った。2022年度以降に留学生の多い明治大学大学院 I-AUD と共同研究を行うための準備を行った。（准教授）

3.2.3. 受賞等の実績

教員の指導による学生の受賞等は、3.1.5に記載している。

【情報部門】

- 電子情報通信学会九州支部 2021年度連合大会講演奨励賞
- CSS2022 奨励賞

【機械工学部門】

- 計測自動制御学会 計測部門 論文賞
- 日本材料学会 支部功労賞
- Japan Association for Computational Mechanics（日本計算力学連合）JACM Fellows Award
- 第8回“ヘルスケア産業づくり”貢献大賞 特別賞

【電気電子工学部門】

- Scientific reports October 2021 Reviewers（教授）
- 3rd Best Paper Award in ICTP2021（教授、准教授）
- Best paper award in ICETC2021（教授、准教授）

- Best paper award in ICSCT2021 (教授、准教授)

【都市工学部門】

- 第34回福岡県美しいまちづくり建築賞 大賞 (准教授)
- 第4回日本建築設計学会賞 (准教授)
- 日本建築学会 建築九州賞 (作品賞) 優秀賞 (九州建築選 2021)
- 日本建築学会 作品選集 2021-22 (准教授)

3.3. 国際・社会貢献の領域

3.3.1. 国際交流実績

【数理部門】

- オンラインによる国際研究集会において講演を行った。(教授、准教授)
- オンラインによる国際研究集会において共同代表、組織委員、座長を務めた。(教授、准教授)
- 外国人研究者を本学に受け入れて、研究交流を行った。(准教授)

【情報部門】

- 国際会議座長 (教授)
- EPAD 立ち上げ (教授)
- 国際会議委員 (准教授、助教)
- 海外大学での講義 (教授)

【化学部門】

- ガジャ・マダ大学 (インドネシア) からの学生の受入 (教授)
- 遼寧大学との国際パートナーシッププログラム (教授)
- Institute Teknologi Sepuluh November の Adjunct Professor としての活動 (教授)
- Workshop on How to work together under the “New Normal” に参加 (教授)
- トリブーバン大学からの学生の受入 (教授)
- ガジャ・マダ大学の教授との共著論文 (教授)
- ドレスデン工科大学との共著論文 (教授)
- 遼寧大学との共著論文 (教授)
- オクラホマ州立大学との共著論文 (教授、准教授)
- GLS on SDGs, ITS, indonesia での発表 (准教授)
- The 11th joint seminar between Liaoning University and Sag University での発表 (教授、准教授)
- The Second International Webinar in Collaboration with Sakura Science Alumni での基調講演 (教授)
- The entrance ceremony of Institut Teknologi Sepuluh Nopember (Indonesia) オンライン入学式において祝辞 (教授)
- The International Guest Lecture of Department of Chemistry, Institute Teknologi

Sepuluh Nopember で招待講演（教授）

- The 1st Tominaga Laboratory International Webinar の主催（教授）
- 8th Asian Particle Technology Symposium (APT2021)で発表（准教授）
- The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (Pacifichem 2021) で招待講演（教授）
- 11th International Conference on Advanced Vibrational Spectroscopy で招待講演（教授）
- INTERNATIONAL SEMINAR "When art meets science, the beauty of porcelain" の主催（教授）
- INTERNATIONAL SEMINAR "Recent Development in Traditional Porcelain" の主催（教授）

【物理学部門】

- 理工学研究科国際パートナーシップ開催（教授、准教授）
- 国際共同研究による論文の発表（准教授）
- 研究のための渡航（准教授）
- 二国間交流事業への参加（准教授）

【機械工学部門】

- 国際学会、会議の運営委員、実行委員など（教授）
- 留学生の受け入れ（教授、准教授）
- 国際会議における招待講演、発表等（教授、准教授、助教）

【電気電子工学部門】

- 国際パートナーシップ教育プログラム（教授、准教授）
- 理工学部客員研究員（国外研究者）受入（教授）
- 国費留学生受入（教授）
- ABE イニシアティブ留学生受入（教授）
- 米国、中国等との共同研究（教授）
- 2021 MRS Fall Meeting（教授）
- 31st ICDCM（教授）
- MRS 2021 Spring Meeting（教授）
- NDNC 2020/2021（教授）
- The 53rd ISCIE International Symposium on Stochastic Systems Theory and Its Applications（教授）
- MDS Virtual Congress 2021（教授）
- 磁気に関する国際会議（2022 Joint MMM-Intermag Conference）（教授）
- 磁気に関する国際会議（IEEE INTERMAG 2021）（教授）
- 数値電磁界解析に関する国際会議（COMPUMAG 2021）（教授）

- 42nd International Symposium on Dry Process (教授)
- 2021 International Conference on Emerging Technologies for Communication (ICETC2021) (教授、准教授)
- 2021 International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP2021) (教授、准教授)
- 19th International Symposium on Antenna Technology and Applied Electromagnetics(ANTEM2021)、参加・発表(教授、准教授)
- International Conference on Science & Contemporary Technologies(ICSCT)参加・発表(教授、准教授)
- ACS Fall Meeting 2021 (教授)
- The 6th Asian Applied Physics Conference (Asian-APC) (教授)
- AAAi2022 (准教授)
- ICML 2021 (准教授)
- ICMLC2022 (准教授)
- ICONIP 2021 (准教授)
- IEEE CEC2021 (准教授)
- IEEE SSCI 2021 (准教授)
- IWSEC2021 (准教授)
- KDD 2021 (准教授)
- The Sixth International Congress on Information and Communication Technology (准教授)
- 27th International Symposium on Artificial Life and Robotics (准教授)
- THE 48th IEEE PHOTOVOLTAIC SPECIALISTS CONFERENCE (准教授)

【都市工学部門】

- 平成 25 年度以来カセサート大学工学部環境工学科の教員及び学生とタイの都市水環境に関する共同研究を継続的に実施してきたが、コロナ禍の影響を受けて研究を一旦中止した。カセサート大学と新たな共同研究のテーマを検討するために情報収集した。(准教授)
- インドネシアの大学(ハサヌディン大学、タドゥラコ大学など)と自然災害とその対策に関する共同研究を継続的に行っている。(教授)
- 台湾淡江大学、日本女子大学、佐賀大学との3大学による『Asia Housing Workshop』をオンラインで開催した。(准教授)
- 日本建築学会のアジア国際農村フォーラムWG主査として主に韓国農村建築学会との継続交流のためオンラインシンポジウム等を企画運営、実施した。(准教授)
- 在来知歴史学国際シンポジウム (ISHIK2020/2021) を、幹事校としてのオンライン開催の企画運営、実施を行った。(教授、准教授)

- チェンマイ大学との国際共同研究を行なった。その成果の一部は、建築学会九州支部等で発表した。（教授）
- 計画通りに同セミナーを開催できた。関連教員と協力して、本学の修士・博士課程のEPGA学生への単位付与を行ったほか、STEPsを中心とした日本人学生への参加を達成できた。（講師）
- 国際学会発表等に参画する機会を逸したものの、国際ジャーナル誌Journal of Environmental Engineering and ScienceおよびAmerican Journal of Science、Engineering and Technologyの編集委員として、査読やWeb会議などを通して国際的な人的交流を行った。（教授）
- 上海交通大学環境学院准教授と遠隔会議を通じて、都市環境と地域エネルギー分野に関わる共同研究を継続し、今後の共同人材の育成の議論を行った。（准教授）
- チェンマイ世界遺産に向けた国際共同研究フォーラムが2月22日にオンラインで実施され、これに参加した。（助教）

3.3.2. 社会貢献実績

【数理部門】

- 論文査読を行った。（教授、准教授）
- オンラインによりジョイントセミナーとSSHリサーチセミナーで講演した。（准教授）
- オープンキャンパスでの模擬授業（教授）
- 他大学大学院での集中講義（教授）

【情報部門】

- 学会支部長（教授）
- 学会各種委員（准教授）
- 学会論文査読委員（教授、准教授、助教）
- 学協会各種委員（教授）
- 国立研究機関関連委員（教授）
- 佐賀県の各種委員（教授、准教授）
- 行政関連委員（教授）
- ジョイントセミナー（教授）
- スーパーサイエンスハイスクール講師（准教授）
- 文部科学省ICT利活用教育アドバイザー（教授）
- 「3DロボットのAI学習体験会」主催（准教授）
- 学生ベンチャー起業支援（准教授）

【化学部門】

- 学会等の論文査読委員（教授、准教授、助教）
- 致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業「課題研究指導」（教授、准教

授)

- 2021 年度佐賀大学「科学へのとびら」講演 (教授、准教授)
- スーパーサイエンスハイスクール講師 (准教授)
- 外部人材を活用した小学校における科学教室 (鹿島市立七浦小学校、武雄市立西川登小学校、小城市立岩松小学校、多久市立東原庫舎東部校、佐賀市立高木瀬小学校、唐津市立小川小学校、伊万里市立松浦小学校、白石町立須古小学校、佐賀県立唐津特別支援学校好学舎) (准教授)
- 佐賀大学ものづくり技術者育成講座 講師 (教授、准教授)
- 鳥栖市立小学校理系教育啓発講演会 講師 (准教授)
- 第 52 回化学工学の基礎講習会 講師 (教授)
- 2021 年度「工学系高度人材育成コンソーシアム佐賀」事業 企画・運営 (教授)
- CIREn レアメタル回収研究分科会令和 3 年度講演会 分科会代表 (教授)
- 佐賀医師会立看護専門学校非常勤講師 (教授)
- 2021 年度佐賀市学校適応指導教室「くすの実」理科教室 生徒指導 (教授)
- 佐賀環境フォーラム 講師 (准教授)
- 佐賀県理科・化学教育懇談会 運営 (教授、准教授)
- JST 審査委員会委員 (教授)
- 日本分光学会九州支部 支部長 (教授)
- 佐賀エコプラザ運営委員会委員 (教授)
- 佐賀市環境審議会委員 (教授)
- 繊維学会西部支部 理事 (教授)
- Editorial Board of Journal of Molecular Liquids, Elsevier, Editorial Board (教授)
- Associate Editor, Bulletin of the Chemical Society of Japan, Associate Editor (教授)
- Japanese Molecular Liquids Group, Chair (教授)
- 中性子課題審査分科会委員 分科会委員 (教授)
- 九州シンクロトロン光研究センター県有ビームライン課題評価委員 評価委員 (教授)
- 九州ファインセラミックス・テクノフォーラム 運営委員 (教授)
- 佐賀県窯業技術センター研究評価委員 評価委員 (教授)
- 日本技術者教育認定機構 審査員 (教授)
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn) レアメタル回収分科会副座長 (教授)
- 九州錯体化学懇談会 事務局 (教授)
- 日本化学会九州支部化学教育協議会 審査研修員 (教授)

【物理学部門】

- 論文査読委員（教授、准教授）
- 日本学術振興会（教授）
- 研究課題審査員（理研、JPARK）（教授）
- SSH 大学研修（致遠館高校）を担当（准教授）
- オンライン公開講座の天体に関する解説ページの更新（教授）
- 科学のとびら委員として活動（准教授）
- NHK 佐賀放送の番組内容に関する取材協力（准教授）
- 全学教育機構における授業開放（教授、准教授）
- 日本中間子科学会会誌編集委員（准教授）

【機械工学部門】

- 学会理事（教授）
- 学会評議員（教授）
- 論文校閲委員・編集委員・運営委員（教授、准教授）
- 学会九州支部理事・評議員・商議員・常議員など（教授、准教授）
- 研究会会長・幹事など（教授、准教授）
- 学会開催の実行委員・運営委員など（教授）
- 県審議会・連携会議委員会委員（教授）
- 放送大学の講師（教授）
- ジョイントセミナー（准教授）
- スーパーサイエンスハイスクールの講師（准教授）
- 科学へのとびら（准教授）
- 佐賀県ロボット研究会（准教授）
- 地域企業技術相談・勉強会（教授、准教授）

【電気電子工学部門】

- 科学技術専門家ネットワーク 専門調査員（教授）
- 九州経済産業局創業支援等事業計画認定評価委員会 委員長（教授）
- 電気学会九州支部 役員（准教授）
- 佐賀県内企業訪問と技術相談 委員（教授）
- 企業の課題と状況相談 技術相談（教授、准教授）
- プラズマ核融合学会九州沖縄山口支部 役員（教授）
- 電気学会論文委員会 編集委員副査（教授）
- 科学研究費委員会専門委員 第1-2段審査（教授）
- プラズマ・核融合学会 九州・沖縄・山口支部 支部長（教授）
- 電気学会論文委員会 A2 グループ 幹事、副主査、主査（教授）
- 科学研究費委員会専門委員 第1-2段審査（教授）
- 令和3年度ものづくり技術者教育講座 電気電子コースの実践エレクトロニクス

(准教授)

- 2021 年度電子情報通信学会九州支部学生会講演大会 講演大会開催地運営担当顧問
(准教授)
- 電気学会計測技術委員会 1号委員 (准教授)
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn) 会長 (教授)
- 佐賀県工業技術センター評議会 委員 (教授)
- 佐賀県工業技術センター研究評価会議 評価員 (教授)
- MWE2021 大学展示 展示会出展 (教授)
- 応用物理学会九州支部 会計幹事 (教授)
- 応用物理学会九州支部 理事 (教授)
- 応用物理学会 代議員 (教授)
- 日本表面真空学会九州支部 役員 (教授)
- 応用物理学会九州支部 支部学術講演会現地実行委員会委員 (教授、助教)
- 佐賀県スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員 (教授)
- 鹿島高校「ジョイントセミナー」(教授)
- 致遠館高校 SSH 大学研修 (教授、准教授)
- 第 21 回工業系高等学校生徒研究発表会 審査員 (教授)
- 令和 3 年度佐賀県工業系高等学校 第 30 回生徒学習成果発表大会 審査委員長
(教授)
- 2021 ロボットアイデア甲子園 審査委員長 (教授)
- 「科学へのとびら」研究体験プログラム (准教授)
- 夢ナビ 工学ナビステーション (教授)
- PVSEC-33, Technical Program Committee member (教授)

【都市工学部門】

<国・自治体等の委員>

- 佐賀県・国交省の審議委員会等、1 件委員長、5 件委員を行った (教授)
- 科学研究費委員会専門委員 (日本学術振興会) を務めている。嘉瀬川・六角川・松浦川学識者懇談会、九州地方整備局新技術活用評価会議、総合評価技術委員会、城原川ダム建設事業費等監理委員会 (共に国土交通省) の委員として活動している。
(教授)
- 佐賀県総合評価技術委員会の委員、佐賀県教育庁の令和 3 年度学校安全総合支援事業推進委員 (災害安全担当推進委員長) を務めた。 (教授)
- 佐賀市空家等対策協議会委員、天草市景観審議会委員、佐賀市中央大通り再生会議委員、有田内山ランドデザイン検討委員会の各委員を務めた。 (准教授)
- 福岡市、佐賀市、鹿島市、武雄市などからの依頼に応じて、審議会委員、委員会委員などを務めた。 (教授)

- 環境省有明海・八代海総合調査評価委員会委員をはじめ、国土交通省（九州河川技術懇談会委員、六角川学識者懇談会委員）、佐賀県開発審査会委員、（公社）日本水環境学会九州沖縄支部理事、佐賀県川づくり委員会の学識者委員（教授）
- 佐賀県総合評価技術委員会委員、有明未利用熱利用促進研究会の技術顧問、SAGA健康省エネ住宅推進協議会副会長、佐賀県公害審査会委員、佐賀工業高校学校評議員（教授）
- 佐賀県建設工事入札審査会委員、佐賀市公共事業評価監視委員会委員（委員長）、唐津市建設工事等入札監視委員会、国土交通省、Tec Doctor（教授）
- 佐賀県建築審査会、佐賀県総合評価技術委員会、多久小城地区新公立病院建築基本設計業務委託事業者選定委員会について委員として携わった。（准教授）
- 佐賀県 都市計画審議会・会長、佐賀県 公共事業評価監視委員、佐賀県 大規模小売店舗立地審議会委員、佐賀県学校安全総合支援事業推進委員・副委員長、佐賀県佐賀城公園 好生館立駐跡地整備検討会委員、佐賀市 佐賀市放置自転車等対策協議会・会長、小城市 都市計画マスタープラン策定検討委員会 委員長、上峰町 中心市街地活性化事業デザイン会議・有識者委員・委員長、鹿島市 都市計画審議会・副会長、武雄市 立地適正化計画策定委員会・委員、神崎市 総合戦略推進委員、道守佐賀会議・副代表世話人、日本都市計画学会九州支部・幹事、低平地研究会 都市空間専門部会 部会長（准教授）
- 地盤工学会の豪雨災害調査団に参画して所定の成果を挙げるとともに、7件の国および県内市町の官公庁における災害復旧事業に関するアドバイザーを務めた。（教授）
- 佐賀県・地域高規格道路軟弱地盤対策工法技術検討委員会・委員、佐賀県・廃棄物処理施設専門委員会・委員、佐賀県道路施設等長寿命化修繕計画検討委員会・委員、西九州自動車道道路法面施工技術検討委員会・委員、東名遺跡保存モニタリング委員会・委員（教授）

<学会、研究会等の委員>

- 低平地研究会の環境専門部会長を勤めた。国内で近年注目されている災害廃棄物問題をテーマに講演会「水害による災害廃棄物の発生状況及び廃棄物の量の推定方法等」を主催し、低平地研究会の会員をはじめ、各方面へ情報発信した。（准教授）
- 土木学会 技術推進機構 土木技術者資格委員会の委員を務めている。（教授）
- 低平地研究会の低平地防災特別部会・部会長を務めている。（教授）
- 日本建築学会『建築雑誌』編集委員、日本建築学会感染症対応建築計画WG、日本建築学会ウイズ／アフターコロナに適応する建築・都市に関する特別調査委員会（准教授）
- KABSE論文集委員会委員、KABSE学生シンポジウム実行委員（教授）
- 日本ヒートアイランド学会の理事として、学会運営に関わった。日本建築学会の都

市環境・都市設備運営委員会委員を務めた。(准教授)

<外部における講演>

- 佐賀県建設技術支援機構主催の令和3年度第3回技術研修会にて「気候変動に伴う河川流域の水不足問題と技術の活用」をテーマに講師を務めた。(准教授)
- さが水ものがたり館で行われた令和3年度 嘉瀬川交流塾「球磨川の治水対策・流域治水の在り方を探る ～令和2年九州豪雨災害を教訓として～」で講師を務めた。(教授)
- 令和3年度 佐賀大学 特別公開講座 都市の防災・減災「近年の豪雨災害と今後に向けた治水適応策」で講師を務めた。(教授)
- 日本建築学会第16回住宅系研究報告会パネルディスカッション“災害危険区域化した元居住地のゆくえ”にて、企画・コーディネートを務め、当日の司会進行を担当した。(准教授)
- 佐賀県地質調査業協会からの要請に応じ、講演を行った。(講師)
- 令和元年と令和3年に佐賀で発生した豪雨災害の調査結果の成果を講演会などで報告した(教授)
- 全学教育機構主催の佐賀大学特別公開講座の講師として講演(教授)

<ジョイントセミナー、SSH>

- 致遠館高校のSSHにおける英語によるプレゼンテーションの指導に協力した。直接指導のほか、大学院の留学生がTAとして活動できるようアレンジした。(講師)
- 佐賀大学ジョイントセミナー:佐賀県立佐賀北高等学校(准教授)
- 佐賀大学ジョイントセミナー:佐賀清和高等学校(教授)
- 佐賀大学ジョイントセミナー:長崎県立佐世保南高等学校(准教授)

<その他の社会活動>

- 嬉野市誌(建築編)の執筆代表として調査に取り組み、成果公開にむけて作業した。
- 日本建築学会農村計画委員会関連として、各地域の住まい方や減災の知恵をまとめる書籍編纂にむけた議論に主体的に参加、準備した。(准教授)
- 地域からの要請で古民家やその活用を検討する「さかの住まいを考える会」(代表)の活動を継続した。(准教授)
- 地域の諸問題に関して「低平地研究会」(幹事長)と連携し地域の課題など研究推進や社会への成果還元などの活動を行った。(准教授)
- 理工学部主催「来てみんなしゃい!佐賀大学へ」を行った。(教授)
- 横断的研究組織CIREn(再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム)を通して、佐賀県新エネルギー産業課からの研究依頼に応じている。(教授)
- 研究成果をまとめた内容を明治大学大学院I-AUDイブニングレクチャー・WIRE-FRAME展レクチャー・稲門建築会受賞者の集い・風景デザインサロン・肥前浜宿ま

ちづくりレクチャー・福岡県建築士会トークセッションなどの講演会で講演を行った。(准教授)

- 佐賀県・佐賀大学工学部が中心となる「再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn)」の「建築等のビッグデータ利活用分科会」の座長として、佐賀県内外の企業と一緒に低炭素社会の実現に向けた地域課題を積極的に取り込んだ。(准教授)
- 戸上電機本社社屋の登録有形文化財に向けた現地建物調査に協力した。(助教)
- 理工学部同窓会(菱実会)および都市工学同窓会(楠志会)ともに広報を担当した。(助教)

3.4. 組織運営の領域

【数理部門】

- 理工学部各種委員、部門内委員の担当(全教員)
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加(教授、准教授)
- 佐賀大学個別入試における数学科目の試験問題の作成、点検、採点を行った。(教授、准教授、講師)

【情報部門】

- 利益相反委員会委員(教授)
- 評価室員(教授)
- 副学部長(教授)
- 学長補佐(教授)
- 他部局併任(教授、准教授)
- 数理・データサイエンス教育推進(教授)
- 「科学へのとびら」専門委員(准教授)
- 学部コース配属処理(助教)
- スマート化プロジェクト(教授)

【化学部門】

- 理工学部および先進健康科学研究科の各種委員の担当(全教員)
- 評価室員(教授)
- 肥前セラミック研究センター センター長(教授)
- 肥前セラミック研究センター セラミックサイエンス研究部門長(教授)
- 安全保障貿易管理アドバイザー(教授)
- 理工学部機能物質化学科 JABEE 認定プログラム「機能材料化学コース」・理工学部理工学科 JABEE 認定プログラム「応用化学コース」プログラム責任者(教授)
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加(教授・准教授・助教)

上記のように、各種センター長をはじめとして各種全学委員会委員長などの要職も務めており、組織運営に大きく貢献している。

【物理学部門】

- 理工学部・工学系研究科各種委員の担当（教授、准教授）
- 学科内の各種委員の担当（教授、准教授）
- 全学委員会の委員を担当（教授）
- 学部入学試験出題委員（教授、准教授）
- 全学教育機構副部長（准教授）

【機械工学部門】

- 理工学部、理工学研究科、先進健康科学研究科の各種委員会委員を担当（全教員）
- 全学委員会委員を担当（教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

【電気電子工学部門】

- 自然科学域長、理工学系長、理工学部長（教授）
- 副学部長（教授）
- 学部長補佐（教授）
- 学長補佐（教授）
- 全学委員会委員（教授、准教授）
- 理工学部組織運営委員会委員長（教授）
- 理工学部教育質保証委員長（教授）
- 先進健康科学研究科学生委員長（教授）
- 先進健康科学研究科教育委員会委員長（教授）
- 理工学部・理工学研究科・先進健康科学研究科の部門長・コース主任・各種委員の担当（全教員）
- 部門関連各種委員（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

【都市工学部門】

- 工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 全学委員会委員（教授、准教授）
- 専攻内教育システム委員会（教授、准教授、助教）

基本的に、部門内教員全員は全学、学部、部門内のいずれかあるいは兼務で組織運営に関わっている。また、一部教員は学長補佐、副学部長、学部長補佐、といった全学および学部の組織運営にも深く関わり、活動している。

4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度

教員の総合的活動状況として、教員個人から自己点検された評価の各領域における評価点ならびに達成度の最小値と最大値をそれぞれの部門の教授、准教授、講師および助教について整理したものが下記の表 4.1 である。

表 4.1 教員自身による自己点検評価（評価点ならびに達成率）

学科	職 種	教育の領域		研究の領域		国際貢献・社会 貢献の領域		組織運営の領域		総合 評価
		評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	
数理部門	教 授	3 - 5	80 - 90	2 - 4	40 - 80	1 - 4	15 - 80	4 - 4	70 - 80	3 - 4
	准教授 (含講師)	3 - 5	60 - 100	3 - 5	60 - 100	2 - 4	33 - 85	3 - 5	60 - 100	3 - 5
情報部門	教 授	4 - 5	90 - 100	2 - 5	40 - 100	3 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	2 - 5
	准教授 (含講師)	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5
	助 教	3 - 4	70 - 100	2 - 4	10 - 70	1 - 4	0 - 100	3 - 4	70 - 80	2 - 4
化学部門	教 授	3 - 5	60 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5
	准教授	2 - 5	50 - 100	3 - 4	70 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 4
	助 教	2 - 4	40 - 90	2 - 4	40 - 80	2 - 3	30 - 80	2 - 5	40 - 90	2 - 2
物理学部門	教 授	3 - 4	70 - 90	2 - 5	40 - 95	3 - 3	60 - 80	3 - 4	70 - 90	2 - 4
	准教授	1 - 4	1 - 100	1 - 4	0 - 90	1 - 4	0 - 100	1 - 4	0 - 100	1 - 4
機械工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 100	3 - 5	60 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 4	60 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 4	50 - 100	3 - 4	60 - 100	3 - 4
電気電子工 学部門	教 授	4 - 5	70 - 181	3 - 5	50 - 111	3 - 5	60 - 363	4 - 5	70 - 110	4 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	2 - 5	50 - 100	2 - 5	35 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 5	50 - 80	4 - 5	80 - 100	2 - 4	20 - 80	4 - 4	50 - 80	4 - 4
都市工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5	50 - 100	4 - 5	70 - 100	3 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	75 - 100	3 - 5	50 - 90	4 - 5	75 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 4	75 - 80	4 - 4	75 - 80	3 - 4.5	70 - 90	3 - 4.5	70 - 90	3 - 3.5

表中、例えば、評価点(3-4)は（最小値 3-最大値 4）であったことを表す。

【数理部門】

この表から、各教員は適正な自己評価を行っていると思われる。

【情報部門】

この表から、各教員が適切に自己評価を行っていると思われる。

【化学部門】

達成率は年度初めの目標に対する実績を示すので、達成率と評価点は必ずしも連動するものではないと考えられる。例えば、高い目標値を設定したものの達成率が 100%でなくても、その実績が十分であれば評価点は高く評価したと考えられる。教員毎の判断基準が統一されていないので容易な判断はできないものの、全体的には厳しい環境の中で高い目標を掲げて積極的に挑戦していく姿勢が見て取れる。また令和 3 年度（2021 年度）は前年度に続いて新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが研究、教育、社

会貢献、国際交流のあらゆる面に影響したが、オンラインによる講義や各種研修、研究打ち合わせなどに対して多くの教員が適応し、新たなツールを活用したことが評価される。しかし国際交流については人流が滞ったことから、その活動の低下が余儀なくされた。今後はコロナ禍前の状況に徐々にではあるが戻ってくると期待できるが、コロナ禍で獲得したオンライン・ツールなどを引き続いて活用し、国際交流や研究、教育などの各種活動を活性化していくことが望まれる。

【物理学部門】

この表から、教員はおおむね適切な自己評価を行っていると思われる。

【機械工学部門】

この表から、一部の教員においてはかなり厳しい自己評価領域がある。これは教員が提出した自己評価原案であり、評価委員が該当教員の活動に鑑み、適正に修正して提出している。全体としては各教員がそれぞれの職分を考慮した適格な自己評価を行っていると考えられる。

【電気電子工学部門】

この表から、各教員は概ね良好な自己評価を行っていると思われる。

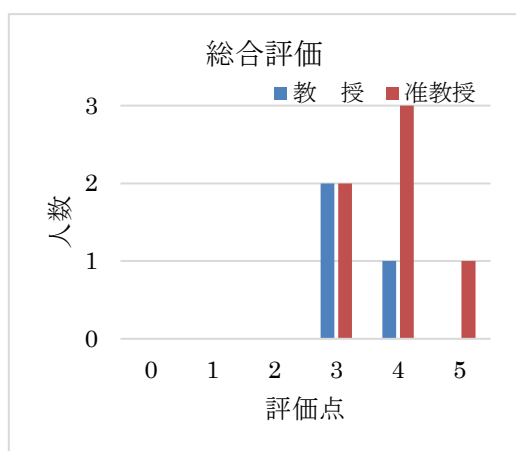
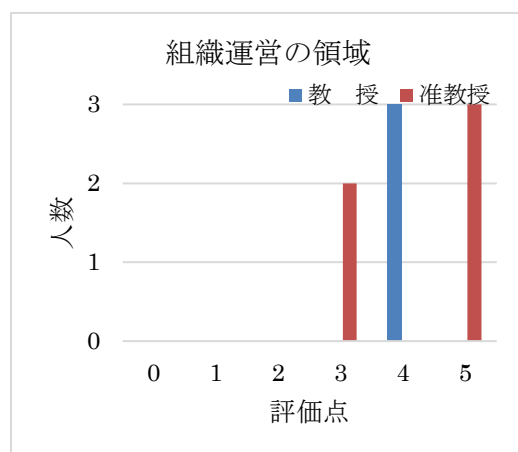
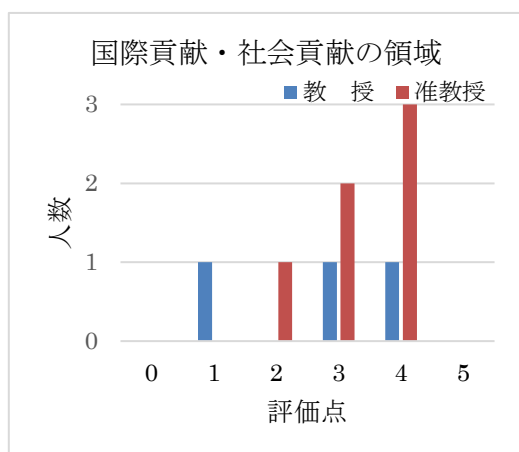
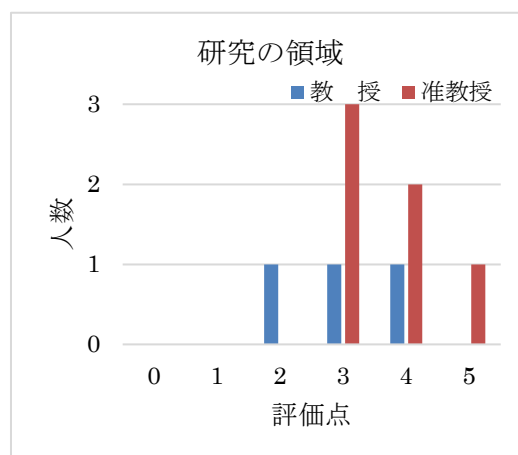
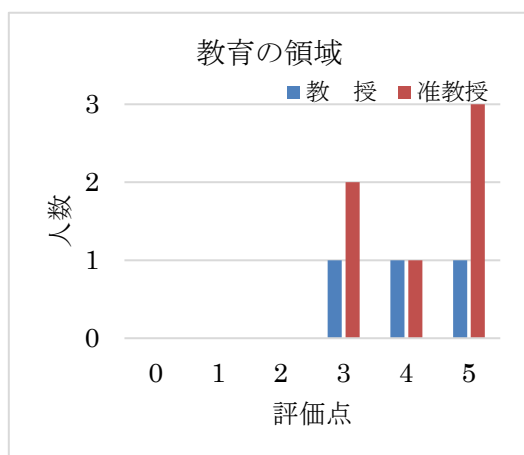
【都市工学部門】

個々人からの申告に基づくこれら自己評価について、実績とつき合わせる限り、各教員は厳格な自己評価を行っていると思われる。

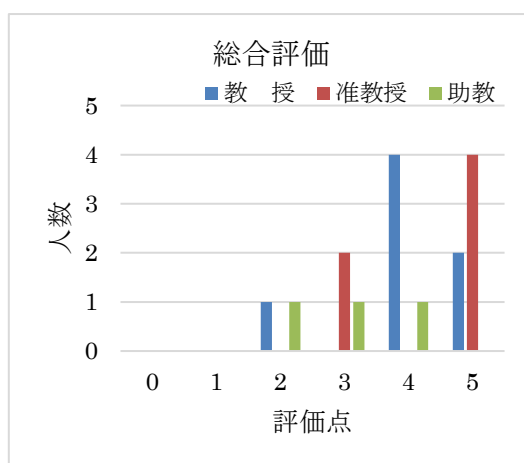
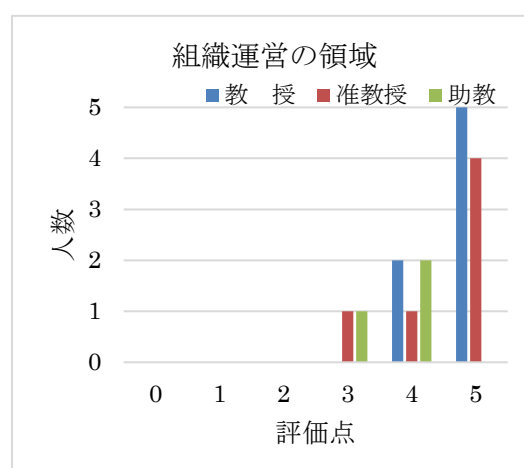
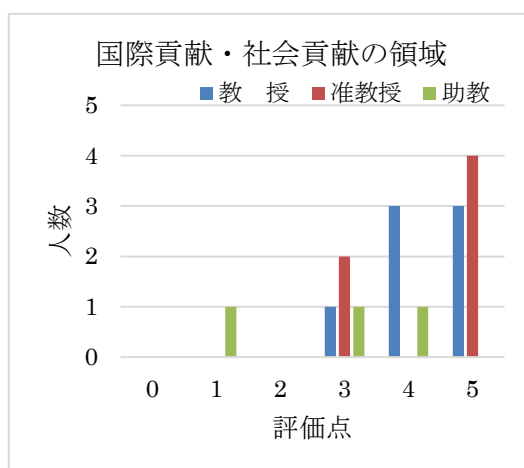
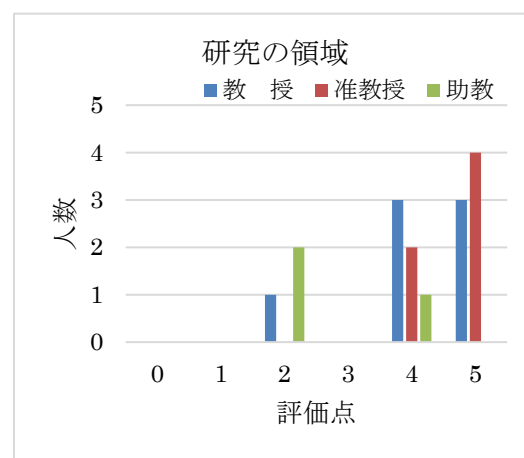
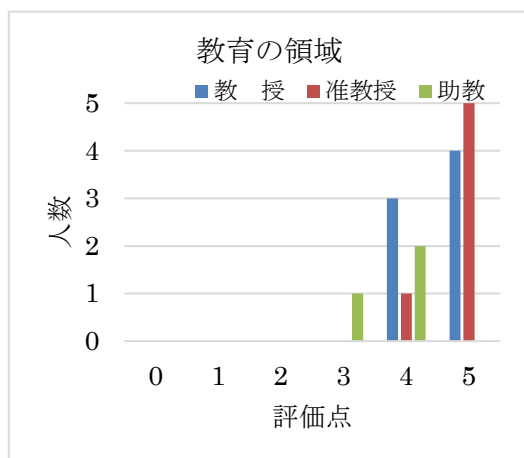
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム

以下の通り、部門毎に各教員が自己点検した評価領域に関する評価点のヒストグラムを示す。「准教授」は准教授と講師の合計を表す。

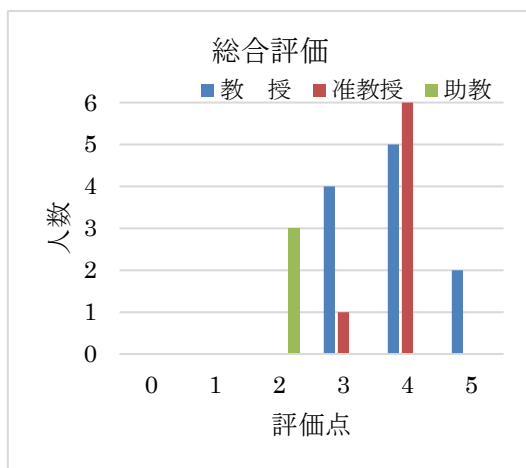
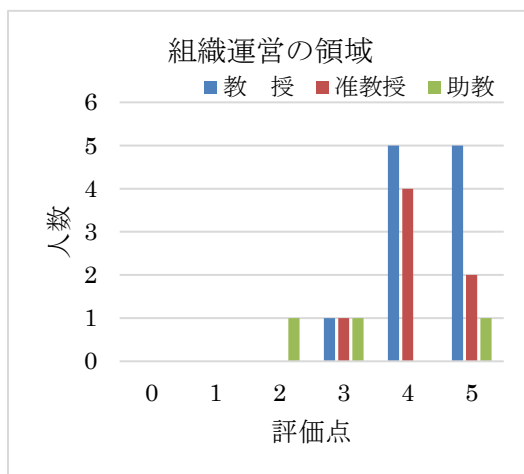
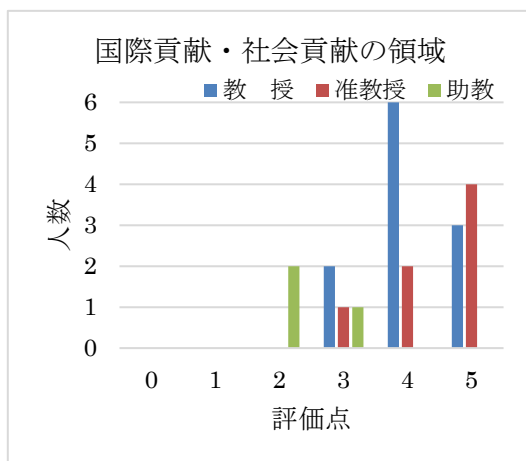
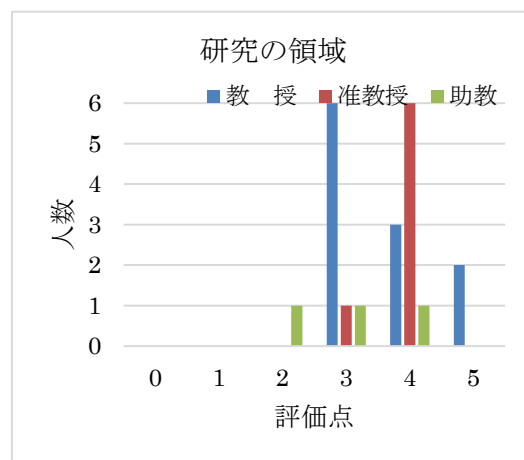
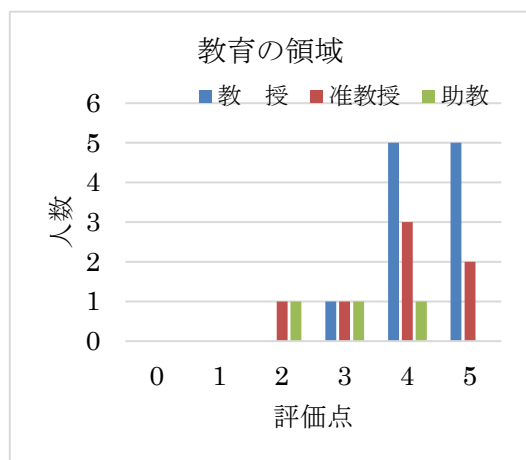
【数理部門】



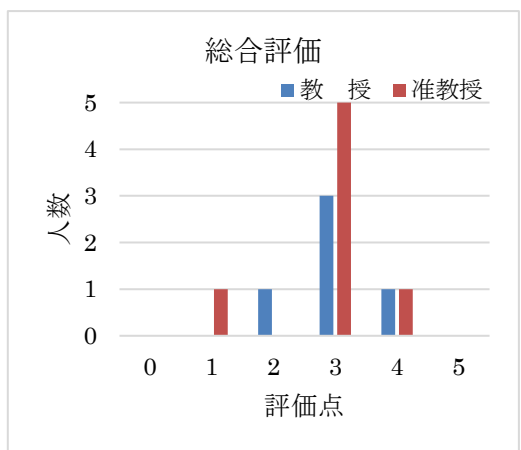
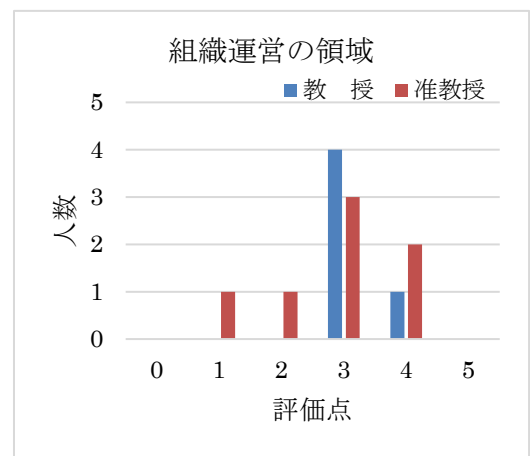
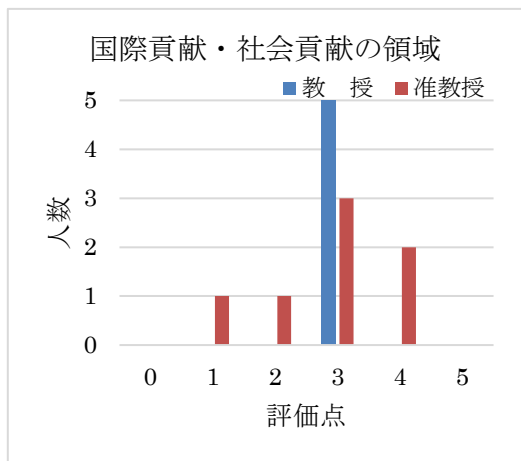
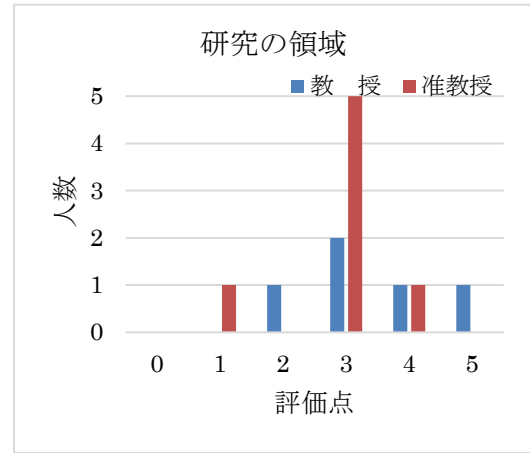
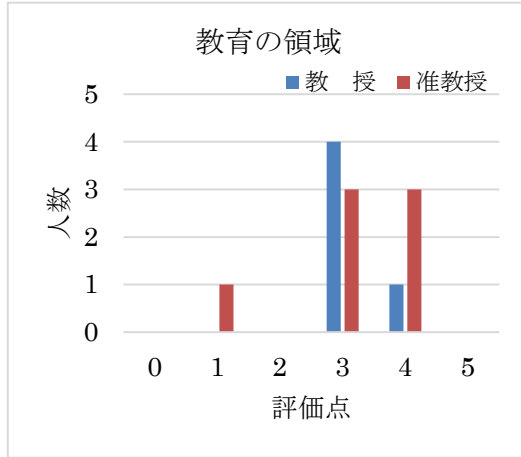
【情報部門】



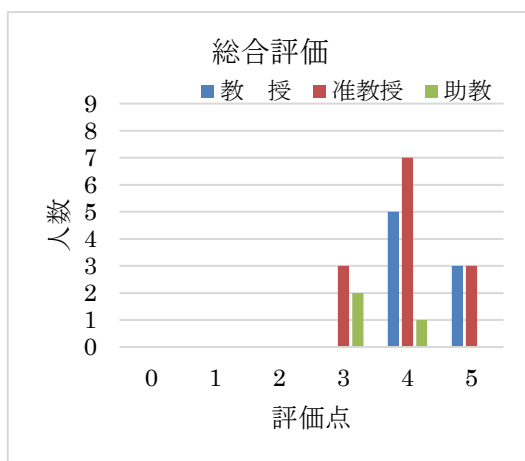
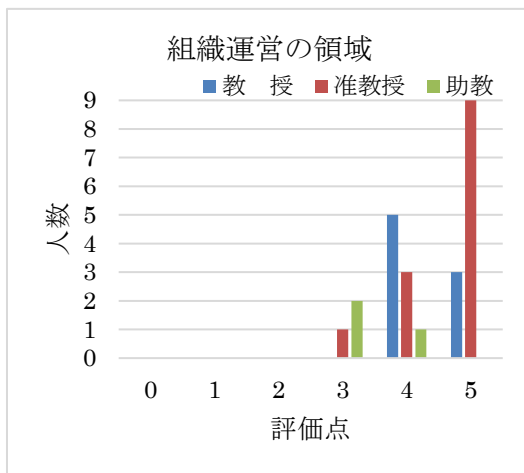
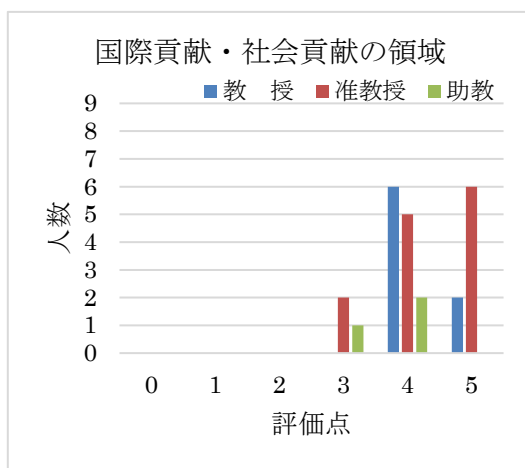
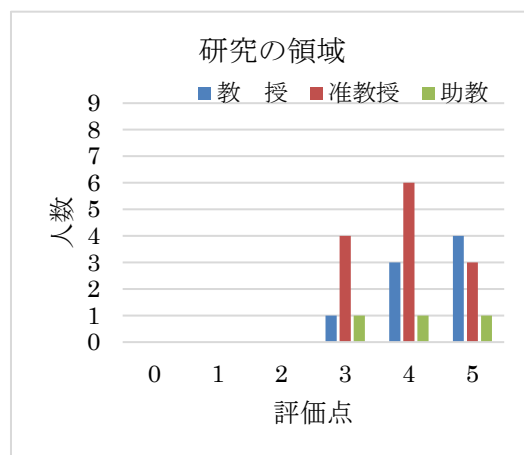
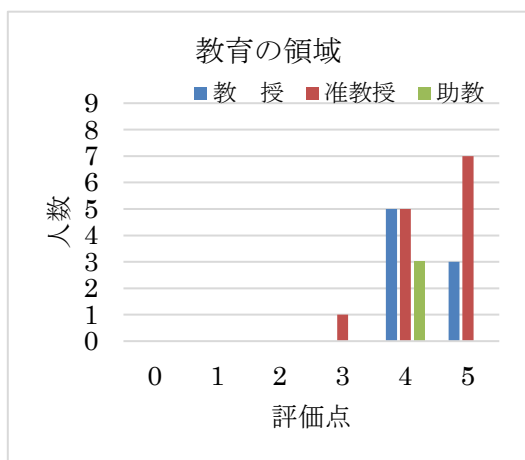
【化学部門】



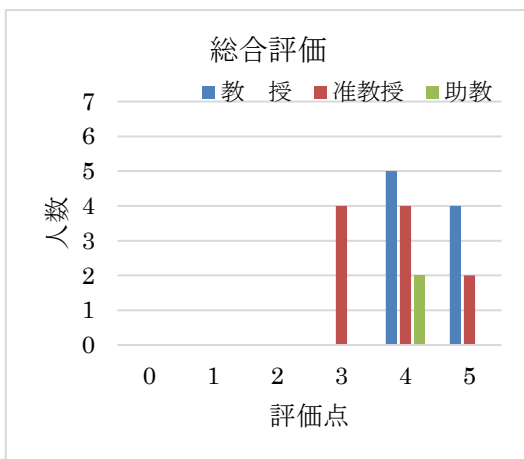
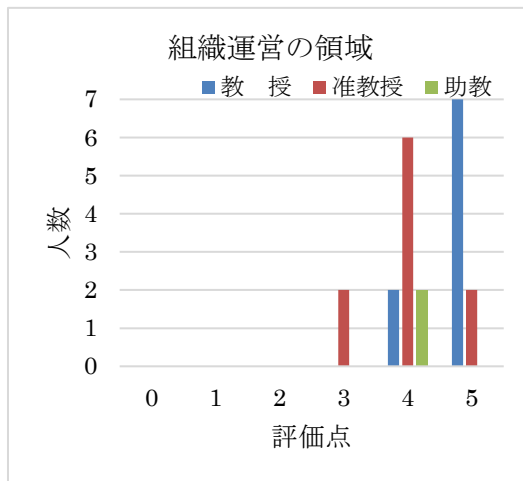
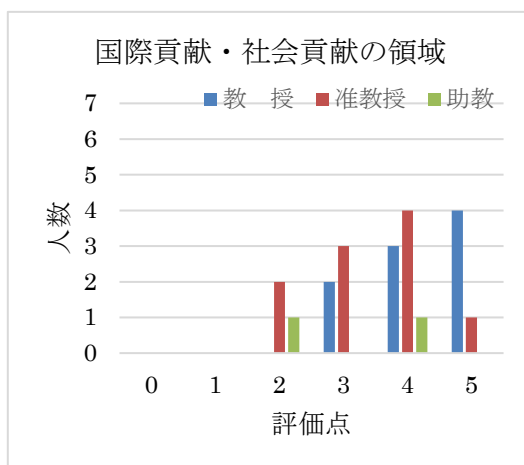
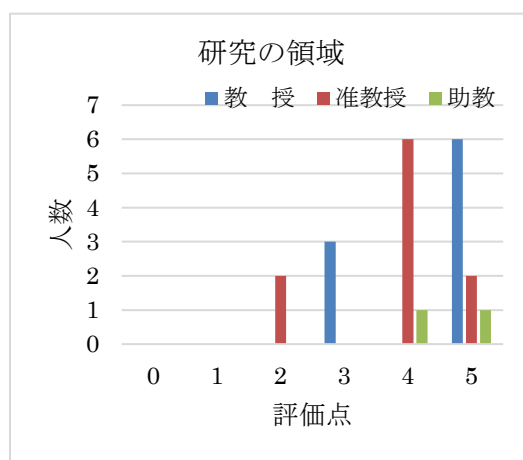
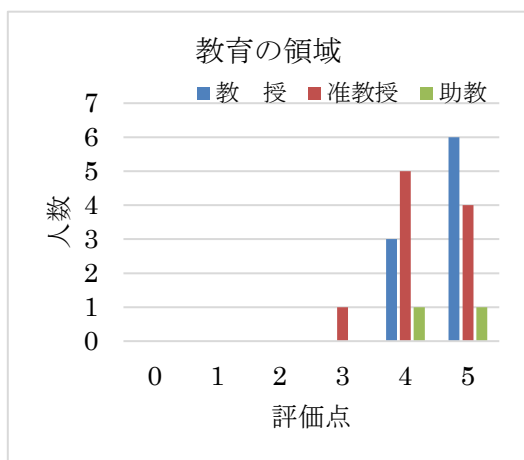
【物理学部門】



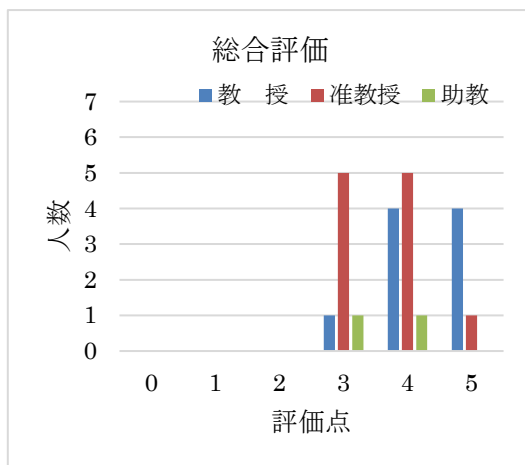
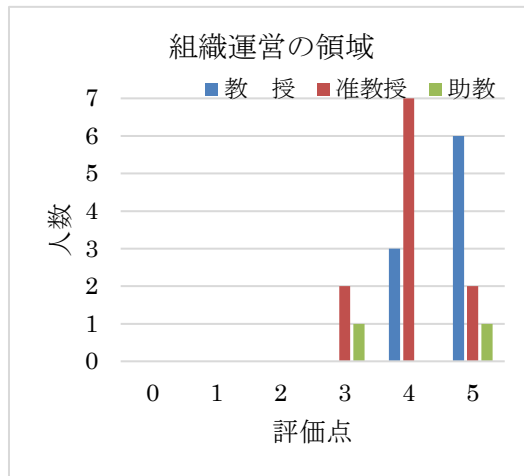
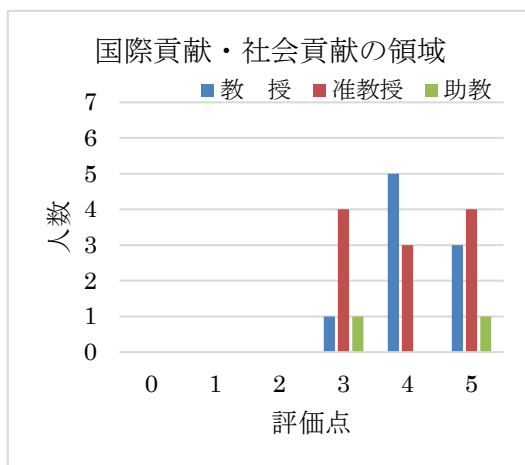
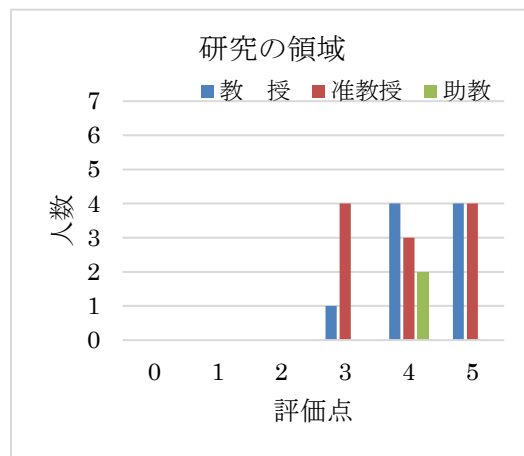
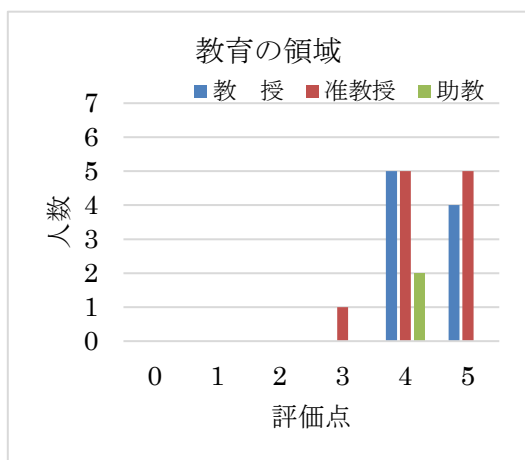
【機械工学部門】



【電気電子工学部門】



【都市工学部門】



4.3. 評価委員からのコメント

各部門の評価委員からのコメントを以下にまとめる。

【数理部門】

- 各教員が真摯に研究及び教育活動を行い、高い科研費採択率、入試問題作成や共通教育などにおいて本学部・本研究科に貢献しているため、自己評価は妥当である。
- 論文発表や国際研究集会への参加および講演など、研究面において質の高い貢献をしていると評価できる。
- 以前よりも教員の教育および組織運営に関する負担は増加している。

【情報部門】

- コロナ禍継続のため、2021 年度も教育活動は非常に困難であった。その中で、情報部門としては、その専門性を活かして教育活動が実施できたことが伺われる。改組に伴う負担増にも対応しつつ、完成年度に向けて実施していく必要がある。
- 研究活動は、活発であった。原著論文も、主に英語による発表が行われている。
- 国際連携の領域では、コロナ禍のため留学生受け入れなどが困難であったが、継続しているプロジェクトでは成果があった。
- 社会貢献の領域では、学会活動の他、国や県の委員会等への参画など、幅広い貢献があった。
- 組織運営の領域では、他部局への併任、学内プロジェクトへの参画、法人活動への参画などがあった。

【化学部門】

- 過去 10 年以上にわたって継続された JABEE 認定プログラムの「教育の質保証」の体制を受け継ぎ、応用化学コースと生命化学コースのいずれも PDCA サイクルに基づいた質の高い教育体制を維持している。
- 大学院教育においては、博士前期課程のみならず、博士後期課程においても多くの日本人学生に加えて外国人学生に対しても指導しており、理工学研究科や関連する先進健康科学研究科の定員充足や活性化に寄与している。学生の教育・研究指導の成果は、学会でのポスター賞の受賞などに反映されている。
- 研究においては、ほとんどの教員が査読付きの英文誌に論文発表をしている。発表論文の中にはインパクトファクターの値が極めて高い雑誌への発表も含まれており、質の高い研究が行われている。学会誌から依頼された総説・解説の和文もあり、その分野で脚光を浴びる成果が得られていると考えられる。
- 外部資金獲得においては、科研費をはじめ JST や民間企業と共同・受託研究の申請を精力的に行い、学内研究費の削減を補う努力をしている。このことから各教員の日々の努力を知ることができる。
- 国際貢献について、2021 年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で国際学会への参加・発表や海外の大学などへの訪問や海外の研究者の招聘などがほとんど停止になっ

た。しかしオンラインでの学会参加などの学術交流が活発だった点が評価できる。

- 地域貢献については、地域の研究アドバイザーとして講師を務める教員や、佐賀県や九州地区の理科教育への協力、佐賀地域の理科・科学振興のための事業への参画など、多くの教員が地域貢献に尽力している。2021年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で中止になった行事などもあったが、オンラインでの開催などの工夫もみられた。社会貢献としては、学会の主要な委員を務める、非営利団体と連携するなどして、学会活動等にも努めている。このように、国際・地域・社会貢献にバランス良く活躍しており、優れた貢献をしていると評価できる。
- 組織運営については、全学、研究科、専攻において本部門教員は幅広く組織運営の責務を果たして活躍している。また重責を担う役職を担う教員もあり、その貢献度は極めて高い。さらに、その重責の責務の教員を部門全体で支える態勢が出来ていることも高く評価できる。

【物理学部門】

- 2019年度から新教育課程が始まり、新たな共通専門基礎科目の担当と旧課程と並行して授業を提供することから教育に関する負荷が大きくなっている。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響で授業の方法が多様化・複雑化し、教育負担が増えている。
- 各々の教員は、継続的にFD活動を行い教育改善に取り組んでいる。さらに、演習問題の頻繁な出題や、授業期間中の中間試験を実施するなどの学生の自習時間を増やす取組が行われている。
- 教員の研究活動は、概ね良好なアクティビティを維持していると思われる。教育研究費が十分でない中、学生（大学院生）による学会発表なども行われており、各教員の高い研究アクティビティが教育の活性化にもつながっている。
- 国際交流や社会貢献等の活動も継続して行われている。また専門性を活かしてアウトリーチ活動にも貢献している教員もいる。

【機械工学部門】

- 教育に関しては、2020年度と異なり基本的に対面授業となったが、コロナ禍による急遽のオンライン教育の実施指示もあり、それらの対応に努力する様子が見られる。また、対面教育とオンライン教育でのそれぞれの教育効果向上に対する各教員の努力の様子が見られる。
- 旧機械システム工学科の教育プログラムは日本技術者教育認定機構のJABEE認定を受けており、コロナ禍においても教員の日々の創意工夫によって質の高い教育が保証・維持されている。これらを改組後の機械工学分野（機械エネルギー工学コース、メカニカルデザインコース）に引き継がれている。個々の講義に関しては、改組によって、とくに学部共通基礎科目などで教員の負担が増える中、各教員が機械工学分野の学習育目標に沿って学生を育成しようとする努力が見られる。
- 大学院教育では、講義での専門知識の修得に加えて、丁寧な研究指導による学生の能力

の向上が図られている。英語による教育にも力が入れられ、オンラインによる大学院学生の国内外の学会での発表も引き続き多く行われている。

- 研究に関して、国内外の学会などにおいて論文発表が精力的に行われている。研究費は、科学研究費補助金のみならず、企業との共同研究、奨学寄付金、財団からの研究助成などの受け入れ、NEDOなどのプロジェクト研究についても積極的かつ継続的に取り組まれている。これらのことから、部門内教員の研究に対する国の機関や民間企業等の強い期待が伺われる。
- 社会貢献・国際交流では、学会等の役員および委員会委員などの活動を引き続き行い、また講演会、研究会なども精力的に開催している。さらに、留学生の受け入れや、国際会議においての情報交換も積極的に行っている。
- 組織運営に当たっては、機械工学部門が担当となる研究科および学部、また部門内の様々な委員を全教員が誠実に努め、責務を果たしている。

【電気電子工学部門】

- 教育の領域においては、新型コロナウイルス感染症による大きな影響がある中で、対面とオンラインを活用した授業が全ての教員によってなされ、前年度から得られた種々のノウハウをFDにより情報共有を図りながら、教育改善に積極的に取り組み、教員それぞれが種々の創意工夫を行っていることが窺い知れる。また、卒業研究や特別研究での教育研究指導により、学会発表等において多くの学生が学会賞等を受賞している。
- 研究活動においては、質の高い論文発表がなされ、共同研究も活発に行われている。また、研究に関する受賞も多くなされている。一方で教員ごとの研究活動のばらつきが大きいことが懸念点である。
- 国際交流においては、オンライン国際会議の普及によって、前年度よりも件数は増加しており、また、共同研究も実施されている。社会貢献においては、学会役員、国際会議プログラム委員、学会編集委員、科研費審査員、行政関係の委員、高大接続事業など幅広い活動が行われている。
- 組織運営にあたっては、自然科学域長、理工学系長、理工学部長、副学部長、学部長補佐、学長補佐、理工学部および先進健康科学研究科の各種委員会委員長をはじめとして、全学委員、学部・研究科内委員、部門内委員を担当し、着実に組織運営業務を遂行している。
- すべての領域において、良好な成果が出ており、教員それぞれが今後も継続的な向上に努めていただきたい。また、自己評価において、達成率が高い領域においては、より高い目標を設定し、達成率が低い領域においては、達成できるように努力していただきたい。

【都市工学部門】

<教育について>

- ・ 新カリキュラムが3年次まで学年進行し、さらには退職教員の補充が行われてこなかったことにより、教育負担（担当コマ数、担当科目数）が増大した。
- ・ 卒研学生指導数は、教授・准教授ともに、前年度に引き続き、増加傾向を示している。これも、教員減と補充の無い状態が続いてきたことによるものといえる。
- ・ 学生の授業評価を踏まえ、学生に分かりやすくする様々な授業の工夫が実践されており、総体的に授業方法の改善が図られていると考える。
- ・ 改組3年目となり、ほとんどが新カリキュラムでの授業となった。しかし、コロナ禍によるオンライン以降が断続的に続いたため、定常状態に戻ったときに参考になるような検証を今後進めていく必要がある。
- ・ コロナ2年目であり、前年のオンラインコンテンツの有効利用など、多くの教員が工夫を重ねており、中には、コロナ収束後にも効率化ができるようなアイデアもあった。

<研究について>

- ・ 研究に関する個人目標の達成度は、教授で85%、准教授（講師含む）で76%、助教で78%の達成率で、全平均では81%であり、総じて良好と評価される。一方で、研究の一評価軸としての論文数は、前年同様、教員個人間でばらつきが大きい。
- ・ 前年度に比べ、教授の論文総数がさらに減少している。学内業務多忙な役職に就く教員が増加したことに加え、コロナ禍で博士後期課程の学生が減少したことが主な原因と考えられる。
- ・ 研究活動の活性化のためには、授業負担、管理運営を含む雑務を効率化によって軽減することが必要であるが、これにも限界があるため、教員、技術職員を含めたスタッフの充実が急務であると考えられる。
- ・ 都市工学部門の学問分野的特性により、共同研究は活発に行われており、国・県の自治体のほか、民間企業との間で研究費の獲得も含め、多種多様な形で取り込んでいる様子が伺える。
- ・ 大学からの研究費が殆ど期待できない中、各自の研究を進めるための研究費獲得では、全ての教員が科研費をはじめ、各種財団等への申請・獲得に向けた活動を実施しており、研究活動への自助努力が窺い知れる。一方で、大型予算獲得には個人研究では対応が困難となりつつあり、学内外の研究者との共同研究を進めるなどの努力が必要ともいえる。
- ・ 近年の自然災害に対する防災・減災の地域ニーズを推し量り、2019年度末から部門内教授を中心に検討を進めてきた、学内の研究拠点化を念頭においた概算要求の申請準備を整え応募したが、残念ながら採択には至らなかった。将来的には、旧低平地沿岸海域研究センターに代わる新たなセンター設置を含めた、構想を再度立ち上げることを検討している。
- ・ 2022年度はコロナ禍の収束し、学会活動等も活性化すれば、論文数や研究費獲得については、ある程度向上すると期待されるが、人事的な改善により、各教員の組織運営、授業担当による負担が軽減されなければ、コロナ前の水準に回復するのは困難ではない

かと考えられる。

<地域・国際貢献について>

- 多くの教員が行政などの各種委員会や審査会、講演会などを介して地域社会に貢献している。
- ほとんどの教員が、国際的な活動に積極的に関わるとともに、外国から研究員、大学院生（留学生）の受け入れ、SPACE-E 学生、海外大学での講義、及び国際的共同研究の実施により、国際学术交流を行ってきた。しかしながら、本年度においてもコロナの影響によって、人的な往来が全くと言っていいほど不可能となり、十分な成果があったとは言い難い状況である。
- 部門の学術的特性により、多くの教員が、国、自治体等の審議委員等を多数兼務し、行政の速やかな執行に貢献している。
- 外部の招きにより講師となり講演している教員も多い。
- SSH、およびジョイントセミナーについては、部門教員も積極的に協力・貢献している。コロナ禍収束後に再び件数が増加するものと思われる。

令和3年度理工学部評価委員会委員

委員長	豊田 一彦	(学部長)
委員	佐藤 和也	(副学部長、評議員)
委員	皆本 晃弥	(副学部長)
委員	山西 博幸	(副学部長)
委員	岡崎 泰久	(教務委員会委員長)
委員	大津 康德	(教育質保証委員会委員長)
委員	市川 尚志	(数理部門長)
委員	只木 進一	(情報部門長)
委員	海野 雅司	(化学部門長)
委員	河野 宏明	(物理学部門長)
委員	萩原 世也	(機械工学部門長)
委員	田中 徹	(電気電子工学部門長)
委員	帯屋 洋之	(都市工学部門長)
委員	松永 貴光	(理工学部事務長)